秋田県文化財調査報告書第135集

カウヤ遺跡第２次発掘調査報告書

―一般国道７号小砂川局改計画路線に伴う埋蔵文化財発掘調査―

秋田県埋蔵文化財センター

1986.3

秋田県教育委員会

カウヤ遺跡第２次発掘調査報告書

―一般国道７号小砂川局改計画路線に伴う埋蔵文化財発掘調査―

１９８６．３

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

象潟町は国指定天然記念物象潟、鳥海国定公園など地形の変化に富み自然美のすばらしい土地として有名ですが、また、多くの遺跡や古刹などもあり、歴史的文化遺産の豊かな町でもあります。

このたび、建設省により象潟町小砂川と大須郷間の国道7号バイパス工事が施工されることになり、秋田県教育委員会では遺跡の記録保存のため、路線上にあるカウヤ遺跡の第2次発掘調査を実施いたしました。その結果、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代の製塩に関する炉跡及びそれに使用された土器などを検出いたしました。特に製塩に関するものは全国的にも調査例が少なく、注目されるものであります。

本報告書は、この調査結果を収録したものであり、郷土の歴史研究と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後に、この調査に御協力いただきました建設省東北建設局秋田工事事務所、象潟町教育委員会、小砂川地区自治会をはじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和61年3月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1　本書は秋田県教育委員会が昭和60年７月４日から同年８月23日にわたって実施した、秋田県由利郡象潟町小砂川に所在するカウヤ遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2　遺跡から出土した土器については、国立歴史民俗博物館教授　岡田茂弘氏・吉岡康暢氏、宮城県多賀城跡調査研究所第１科長　進藤秋輝氏から御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

3　本書の執筆は柴田陽一郎　編集は秋田県埋蔵文化財センターが行った。

4　土器の色および遺構断面図の土色の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』に拠った。

5　本書に使用した地図は建設省国土地理院発行５万分の１、建設省東北地方建設局秋田工事事務所発行1,000分の１の地形図である。

6　遺構にはその性格に関係なく、全て通し番号を付した。

7　挿図中の遺物実測図と拓本は全て通し番号とし、図版中の遺物もそれにしたがった。

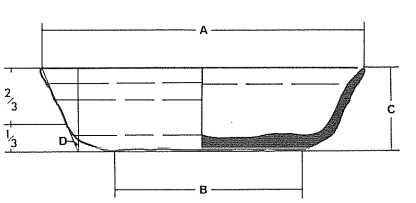
8　土師器と区別するため挿図中の須恵器断面は黒く塗りつぶしてある。また、スクリーントーンを貼付してある土器は黒色処理された土器である。

9　挿図中の土器の実測図と図版中の土師器杯、須恵器杯は３分の１の縮尺で、図版中の土師器甕、鉢（製塩土器）、須恵器甕、壺の縮尺は５分の１を原則とした。

10　遺構の略記号は以下の通りである。

　ＳＩ　竪穴住居跡、ＳＤ　溝跡、ＳＫ　土壙、ＳＮ　焼土遺構、ＳＸ　その他の遺構

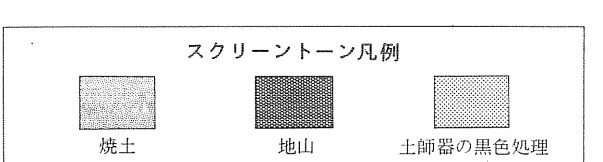
11　挿図中のスクリーントーンの使い分けと、杯の法量計測基準は以下のようにした。



Ａ：口径　Ｂ：底径　Ｃ：器高　Ｄ：外傾度

底径指数：$\frac{B}{A}$　高径指数：$\frac{C}{A}\times 100$

杯の法量計測基準



目　　次

序

例　言

第１章　はじめに …… 1

第１節　発掘調査に至るまで …… 1

第２節　調査の組織と構成 …… 1

第２章　遺跡の立地と環境 …… 3

第１節　立地と環境 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　発掘調査の概要 …… 5

第１節　遺跡の概観 …… 5

第２節　調査の方法 …… 5

第３節　調査の経過 …… 6

第４章　調査の記録 …… 7

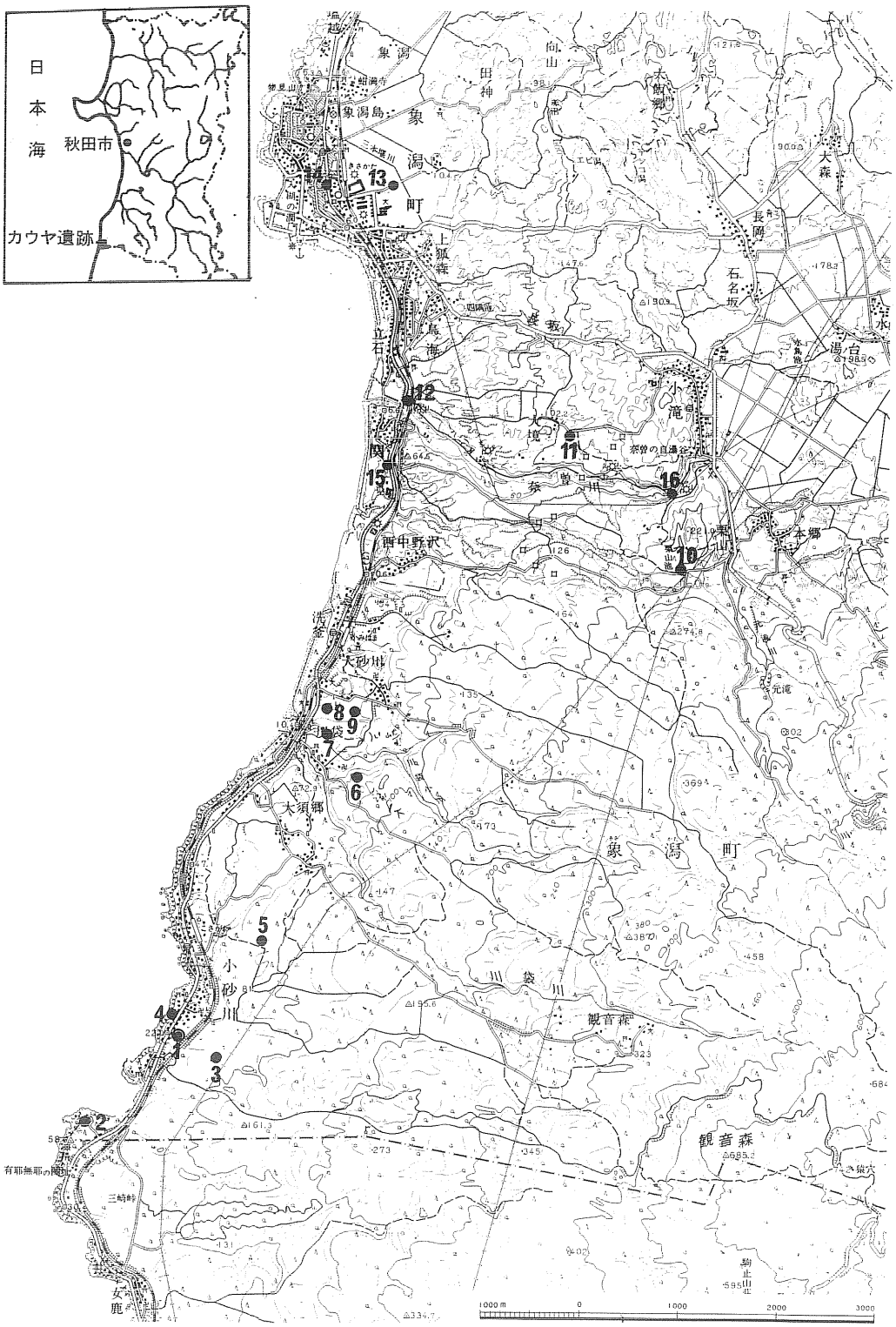
第１節　縄文時代の遺物 …… 7

第２節　平安時代の遺構と遺物 …… 7

第３節　その他の遺構と遺物 …… 21

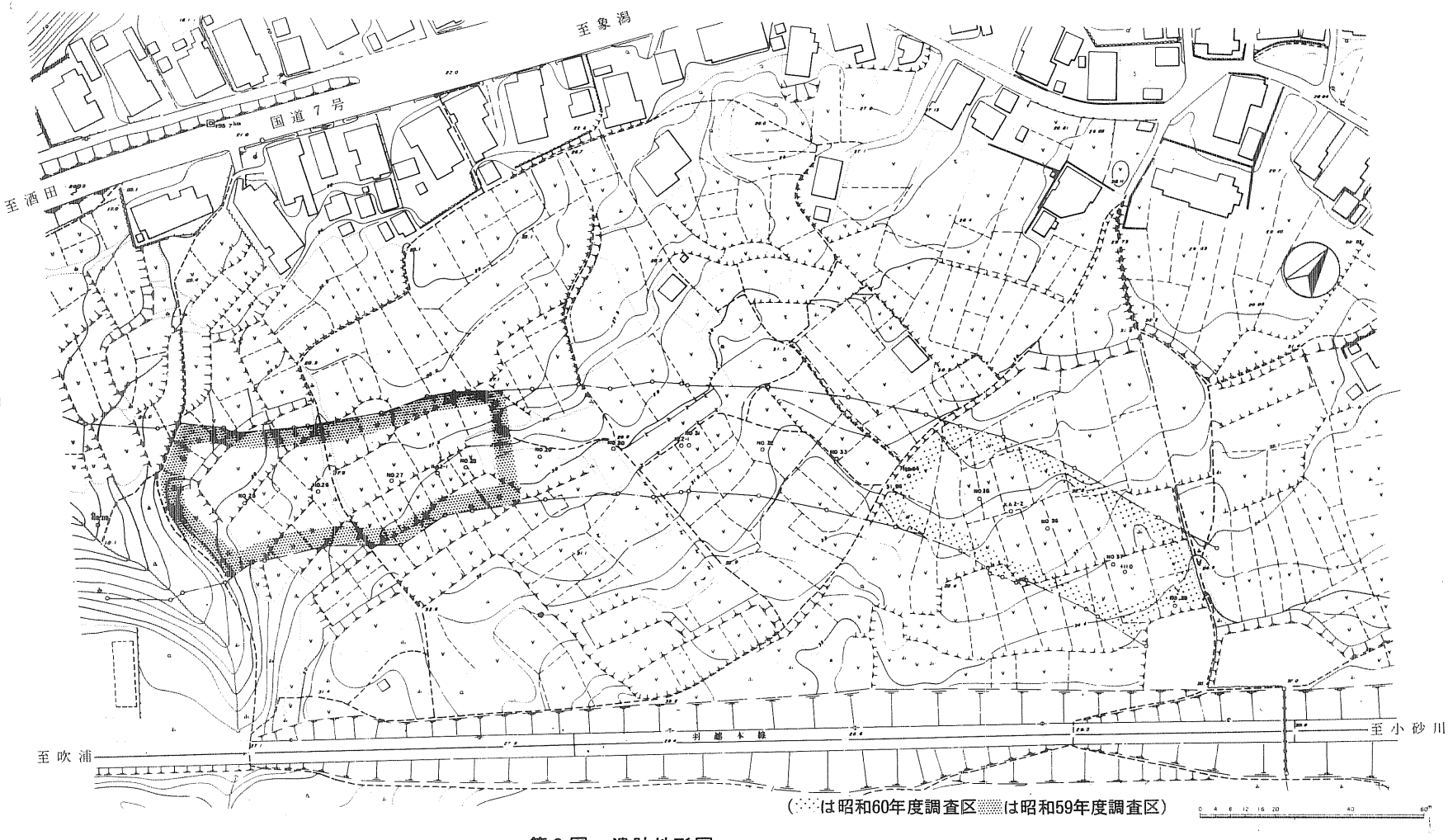
第５章　まとめ …… 48

別　編　カウヤ遺跡出土土器の胎土及び遺跡内の土壌分析 …… 50

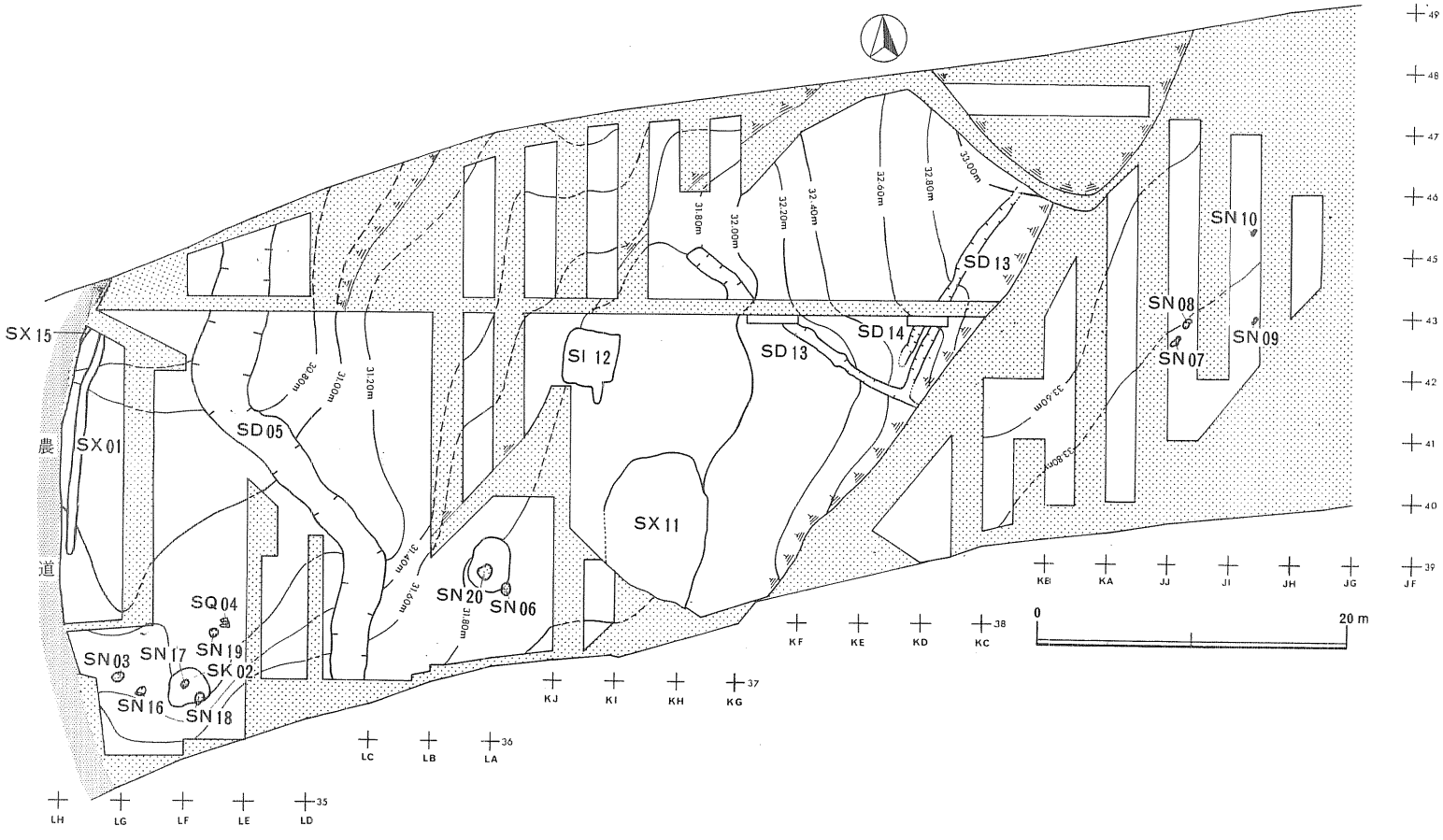


1　カウヤ　2　小砂川三崎　3　小砂川水上　4　小砂川中磯　5　小砂川下向坂
6　川袋滝ノ下　7　川袋川崎　8　菅先　9　ヲフキ　10　栗山池　11　ヨシハ沢
12　下居観現森　13　九十九島　14　塩越城　15　関新館　16　国見館

第１図　遺跡位置図



第2図　遺跡地形図


SX 15
SX 01
SD 05
SI 12
SX 11
SD 13
SD 14
SN 10
SN 08
SN 07
SN 09
SN 20
SN 06
SQ 04
SN 03
SN 17
SN 19
SK 02
SN 16
SN 18
農
道
31.80m
32.00m
32.20m
32.40m
32.60m
32.80m
33.00m
33.40m
33.80m
31.00m
31.20m
31.40m
31.60m
31.80m
49
48
47
46
45
43
42
41
40
39
38
37
36
35
KB
KA
JJ
JI
JH
JG
JF
KF
KE
KD
KC
KJ
KI
KH
KG
LC
LB
LA
LH
LG
LF
LE
LD
0
20 m

第３図　遺構配置図

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

カウヤ遺跡の発掘調査は、建設省東北地方建設局の一般国道７号改良工事（小砂川バイパス建設事業）に係る緊急発掘調査で、秋田県教育委員会が建設省東北地方建設局の委託を受け、昨59年度に第１次発掘調査を実施し、今年度第２次発掘調査のはこびとなったものである。本事業は小砂川地内の交通渋滞緩和のため、山形県境に近い三崎峠の北端から小砂川に入り、集落東側の山裾を通り大須郷に至る間、約４㎞をバイパスで結ぶ工事である。

さて、カウヤ遺跡は昭和57年に秋田県教育委員会が分布調査を実施し、古代の集落跡である事を確認した遺跡で、これを縦断するバイパス工事が昭和59年度から行われることになったため、削土などによって破壊される路線内の対象部分について記録保存を目的に、工事に先立って第１次発掘調査を実施した。第２次発掘調査は昭和60年４月に工事予定区域内の範囲確認調査を行い、それを受けて７月、８月に実施したものである。

第２節　調査の組織と構成

遺跡所在地　由利郡象潟町小砂川字カウヤ58―３番地他

調査期間　昭和60年７月４日～８月23日

調査対象面積　2,612㎡

調査面積　1,623㎡

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター　文化財主事）
栗沢　光男（　　同　　同　）

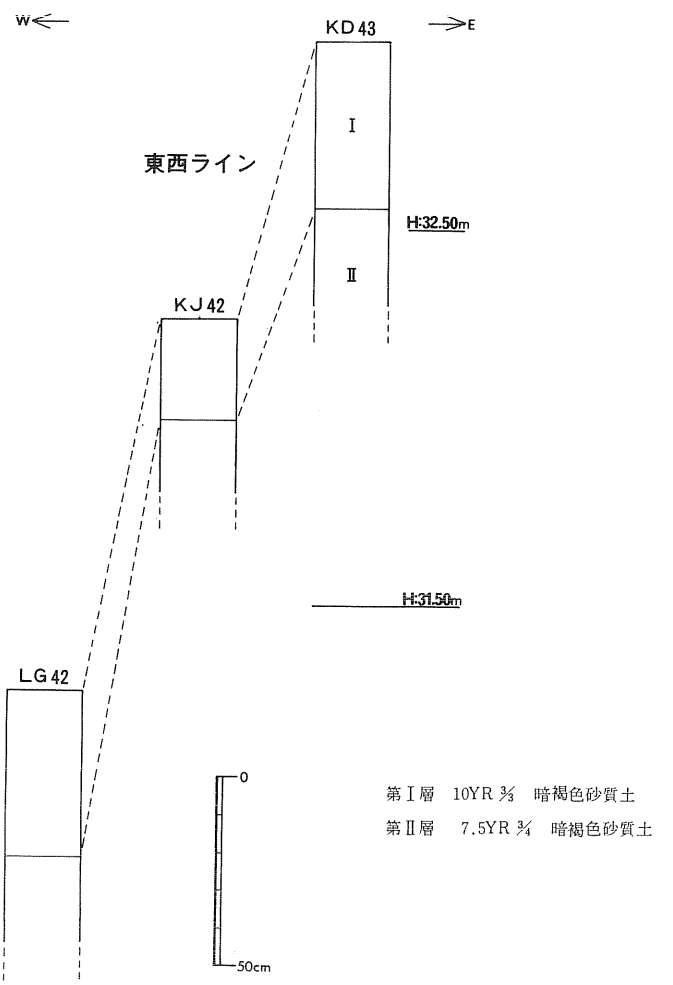
調査事務担当者　加藤進（秋田県埋蔵文化財センター　主査）
佐藤健（　　同　　主事）

調査作業員　伊藤得郎　加藤義助　加藤富夫　加藤信吉　土門栄司　土門甚作　土門惣一郎　土門忠蔵　伊藤三津夫　伊藤弥三治郎　藤井広松　須藤夏雄　池田武治　後藤睦男　阿部久一　菅原晃　本多康彦　須藤留治　近藤節子　加藤ヒデ子　加藤明子　伊藤相子　伊藤舜子　土門トヨミ　土門シマ　菅原

光子　斉藤紀美子　佐藤よし江（登録順）

整理作業員　青谷透　藤井幸誠　小山内透　熊谷道宏　佐々木アイ子　稲葉アイ　小松美智子　進藤玲子　泉谷昭子　加藤えり子　小松郁子　倉田美佳　大西英子　大野甲子　皆川恵子　斉藤美江子（順不同）

調査協力　建設省東北地方建設局秋田工事事務所、同本荘国道維持出張所、象潟町教育委員会、同役場建設課、小砂川地区自治会



第4図　土層柱状図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　立地と環境

象潟町は秋田県の南西端にあって、由利地方の中でも最も気候温暖な地域として知られている。東は仁賀保町、北は金浦町、南は山形県遊佐町に接し、西は日本海に面し、南東には出羽富士と呼ばれる鳥海山（2,237ｍ）がそびえる。

カウヤ遺跡は、山形県境まで約１㎞の距離（第１図）で、国鉄羽越本線小砂川駅から南南西約１㎞の地点にあり、東経139°53′10″、北緯39°07′10″に位置する。

小砂川一帯は鳥海山から噴出した火砕泥流堆積物によって形成され、その上に海からの飛砂が厚く堆積している。本遺跡では約２ｍほどの砂の堆積が認められた。海岸線は火砕泥流によってできた崖が海水の浸食を受けて奇岸となり、国道７号沿いにまれに見る景勝地を形成している。遺跡から海岸線までの距離は約200ｍである。

遺跡の規模は南北約350ｍ、東西100ｍにわたる範囲と推定されるが、南は比高差10ｍほどの急斜面で、北は西に緩く傾斜している。東は鳥海山や観音森（685ｍ）に続く丘陵があり、西の海岸線まで斜面が続く。

第２節　歴史的環境

象潟町は海岸線に恵まれ、鳥海山に続く山々が海の近くにせまり、白雪川、奈曽川、川袋川などの河川があり、自然環境に恵まれている。このため、大砂川や川袋川の河口もしくは河川の近くに縄文時代を中心とした遺跡が多く所在するが、特に大砂川付近は早くから土器、石器、土偶などの出土が報じられ、全県的に有名であった。1915（大正５）年には、東京帝国大学人類学教室、大野雲外教授が資料収集のため来町している。

旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代になるとその数は増加する。本遺跡周辺の遺跡を見てみると、古い時期の遺跡は未発見であるが、中期では川袋滝ノ下遺跡（第１図６－晩期との複合）、川袋川崎遺跡（７－晩期との複合）、菅先遺跡（８－後期との複合）、後期ではヲフキ遺跡（９）、萩坂遺跡がある。晩期では、栗山池遺跡(10)、ヨシハ沢遺跡(11)がある。他には小砂川三崎（２）、小砂川水上（３）、小砂川中磯（４）、小砂川下向坂（５）、下居権現森(12)の各遺跡があり、大砂川や川袋、小砂川の海岸線もしくは河川の近くに多くの遺跡が所

在している。

弥生時代になると遺跡数は減少し、わずか九十九島遺跡(13)だけとなる。

奈良・平安時代の遺跡としては金環、管玉が出土した管ケ崎古墳があるが、その所在地については大砂川であろうと推定されているものの、墳丘が残っておらず、出土品が早くから知られているわりには詳しい事は不明である。

中世城館としては、汐越氏が構築したとされる汐越城（14―別称　八十島城）があり、他に関新館(15)、国見館(16)などがあるが、それ以外は土砂採取などのため消滅して不明なものが多い。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

カウヤ遺跡は、日本海の汀線から200ｍほどの距離で、標高21～34ｍの台地上に位置している。遺跡全体が東から西に傾斜しているが、今回の調査対象区は南東から北西にかけて緩やかな斜面となっている。南は比高差10ｍほどの急斜面で下は小沢となり、北は端部で緩斜面となる。

本遺跡は砂地で、古くから段々畑として利用されており、地形は東から西に比較的急な斜面となっている。そのため、畑として使用する際に砂を削平して平坦部を確保したという事が、土層断面の観察によってわかる。この他に西側のＳＱ04炉跡、ＳＫ02土壙、中央部のＳＮ06焼土遺構、東側のＳＮ07～ＳＮ10焼土遺構付近では、長芋栽培などによる後世の攪乱が遺構の確認面及び覆土半ばまで及んでいた。昨59年度の調査では、表土から黄褐色火山灰土まで全部砂で、その厚さは２ｍに達した所もあった。

今回の調査区の土層は第Ⅰ層が表土ー耕作土ーで層厚約40～45cm、第Ⅱ層が遺構確認面（上部）となる。

第２節　調査の方法

遺跡の規模は、南北約350ｍ、東西約100ｍにわたる範囲と推定される。そのため、昨年度の第１次調査のグリッド設定は、道路のセンター杭である「ＳＴＡ25」を原点のＰＡ10として、これから磁北に合せた南北基線（Ｙ軸）と、これに直交する東西基線（Ｘ軸）を求め、調査区の北東端に控杭を打設して、第２次調査に備えた。そして本年は、控杭の基線を調査区に移動し、ＬＧ39を原点とした。

つまり南北方向には、４ｍ毎に二桁の算用数字、東西方向には４ｍ毎にアルファベット２文字を付し、その組み合せでグリッドを呼称した。原点のＬＧ39から南にＬＧ38・ＬＧ37……、北にＬＧ40・ＬＧ41……、東にＬＦ39・ＬＥ39……、西にＬＨ39・ＬＩ39となり、アルファベット２文字は40ｍ毎に変る。グリッドの呼称はそのグリッドの南東隅の座標名で呼ぶこととした。

第３節　調査の経過

発掘調査は、７月４日から８月23日にわたって行った。調査に先だって、業者委託によるグリッド杭打設を行った。

７月４日、午前中に資・器材を搬入し、10時30分より象潟町公民館小砂川分館にて、作業員に対して発掘調査説明会を実施した。夕方までに調査区の草刈りとプレハブ設置完了。５日、調査区全景を写真撮影した後、調査区の西端グリッドから表土剝ぎを開始し、ほぼ全グリッドで土師器、須恵器の出土をみた。夕方までにベルトコンベアー、ローリングタワーなどの搬入を完了。８日、ＬＧ40～42グリッドで北に伸びているＳＸ01を検出した。砂地のため掘下げはことのほか進行が早い。今日も猛暑であった。14日、ＳＤ05を検出。覆土上面の凹地から投棄された状況で土器片が多く出土した。

15日、ＳＫ02、ＳＱ04を検出し、ＳＫ02の精査を開始した。西側の掘下げはほぼ終了し、その主体を東側に移す。18日、西側に入れたトレンチを遺構のない所から順次埋戻した。24日、本日より中央部の調査を開始する。排土は東、西の既調査区で埋戻しの終了した箇所に盛る事にした。31日、今日も相変らずの猛暑で、砂の照返しがきつい。調査に入ってから降雨のあったのはたった１日のみである。

８月１日、ＫＨ39グリッド付近で多くの土師器が出土する。それは黒褐色土の落込みに伴うもののようである。ＳＸ11とした。ＳＸ11の北西にてＳＩ12を検出した。10日、ＳＸ11の南端部を拡張してみたらその一部が路線外に続いている事が判明した。ＳＸ11の南東部より鼓状の支脚が２個体出土した。

19日、午前中、遺跡の航空写真撮影終了。20日、残っていた西側の埋戻し作業とプレハブの撤去、発掘資・器材の搬出を行った。21日、22日に残っていた遺構の実測や補足を行い、22日夕刻、全ての調査を終了した。

第４章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺物

縄文土器がＫＡ41・ＫＢ41グリッドの第Ⅱ層上面でややまとまって出土したが、周囲に遺構は検出されなかった。

第15図の１は深鉢と思われる土器の口縁部で、隆帯上と器外面にＬＲ縄文を施文したものである。２～６は口縁部に近い部位で、いずれも隆帯を貼付している。８は胴下半部で外面にＬＲ縄文、内面は煤状炭化物が付着している。９、10は深鉢形の胴下半から底部で、底面は網代痕である。１～10とも胎土には砂粒が混入し、風化しているものもある。色調は褐色ないしは赤褐色を呈する。

縄文時代前期末の所産であろう。

第２節　平安時代の遺構と遺物

１　検出遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

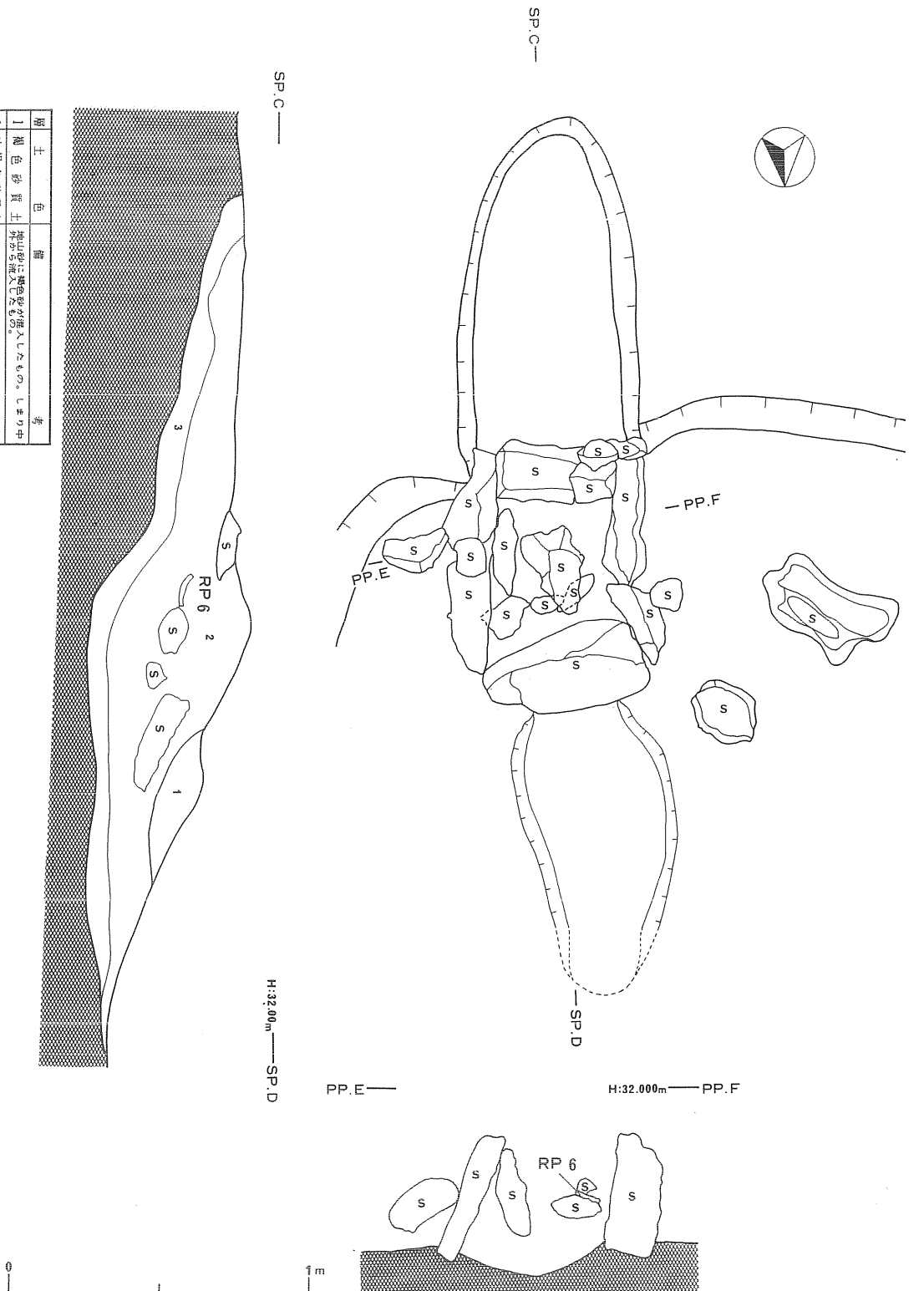
ＳＩ12　竪穴住居跡（第５図、第６図）

ＫＩ41・ＫＩ42グリッドに位置し、西壁の長さ3.54ｍ、南壁の長さ3.07ｍで平面形は不整方形を呈する。面積は11㎡で、主軸方位はＮ－1°－Ｗでほぼ磁北に沿う。

砂地のため壁は一部崩れているが、高さは東壁で53～54㎝、西壁で25㎝で、ゆるやかな立上りを示す。床面は平坦でやや締まり、柱穴や壁溝は検出されなかった。カマドは南東隅にあり、袖部や天井部には10～56㎝の扁平な石もしくは加工したものと思われる板状の石を芯材として用いて、その上に暗褐色砂質土を覆土としている。煙道部は壁外にのびる。

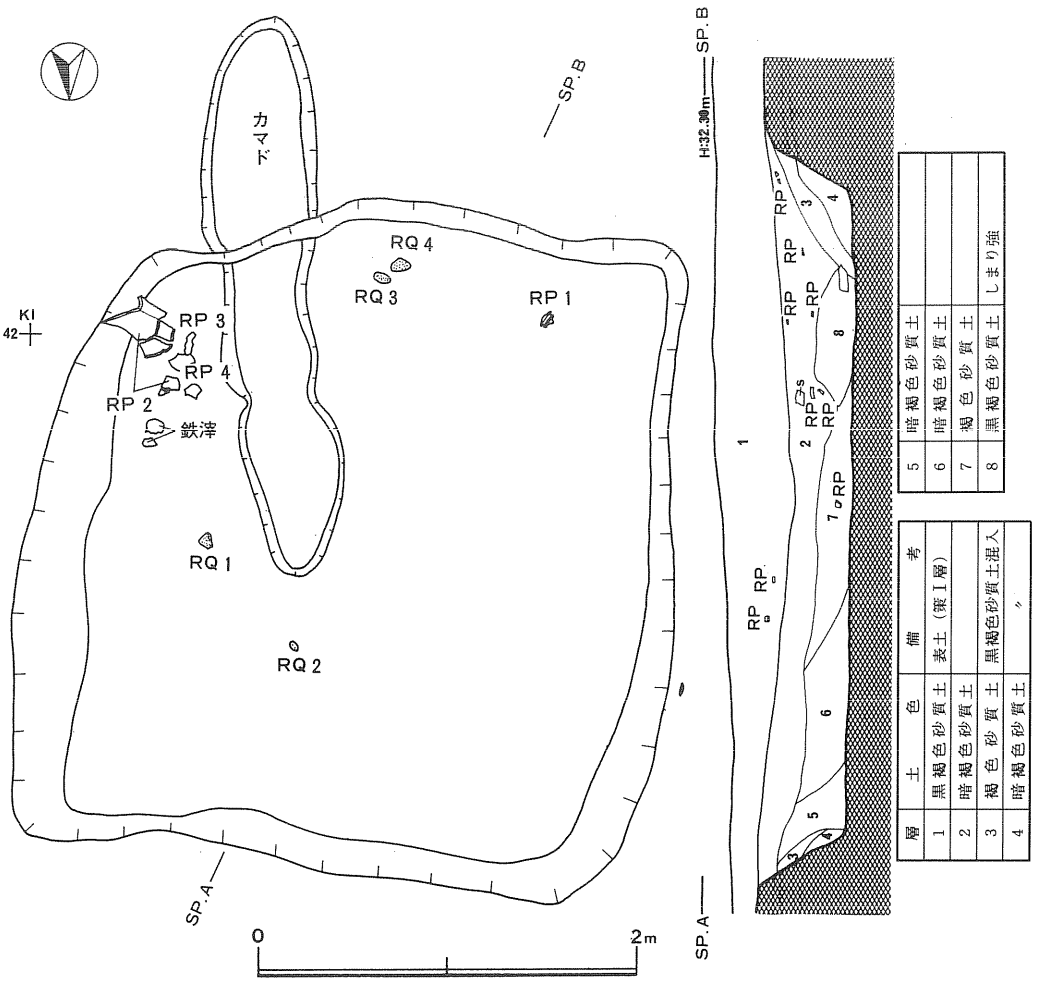
出土遺物（第16図11～23）

11、12は須恵器杯で回転ヘラ切りで、11は丸底を呈する。13は須恵器高台付杯で回転ヘラ切りである。14は叩き目のある土師器長胴甕である。ロクロ成形で、器形は砲弾形を呈するものであろう。外面は、横ナデ→ケズリ→格子目のタタキ目、内面は、横ナデ→同心円状のアテ具痕を残す。13は床面、11、12、14はカマド脇で、床面から５～７㎝ほど上で一括出土した。15～17は土製支脚で、カマド内出土である。18は製塩土器と思われる土器の底部で、カマド内出



層	土色	備考
1	褐色砂質土	地山砂に褐色砂が混入したもの。しまり中
2	暗褐色砂質土	外から混入したもの。しまり中
3	にぶい黄褐色砂質土	地山砂と２層が混入したもの。しまり中

第６図　ＳＩ12　竪穴住居跡カマド



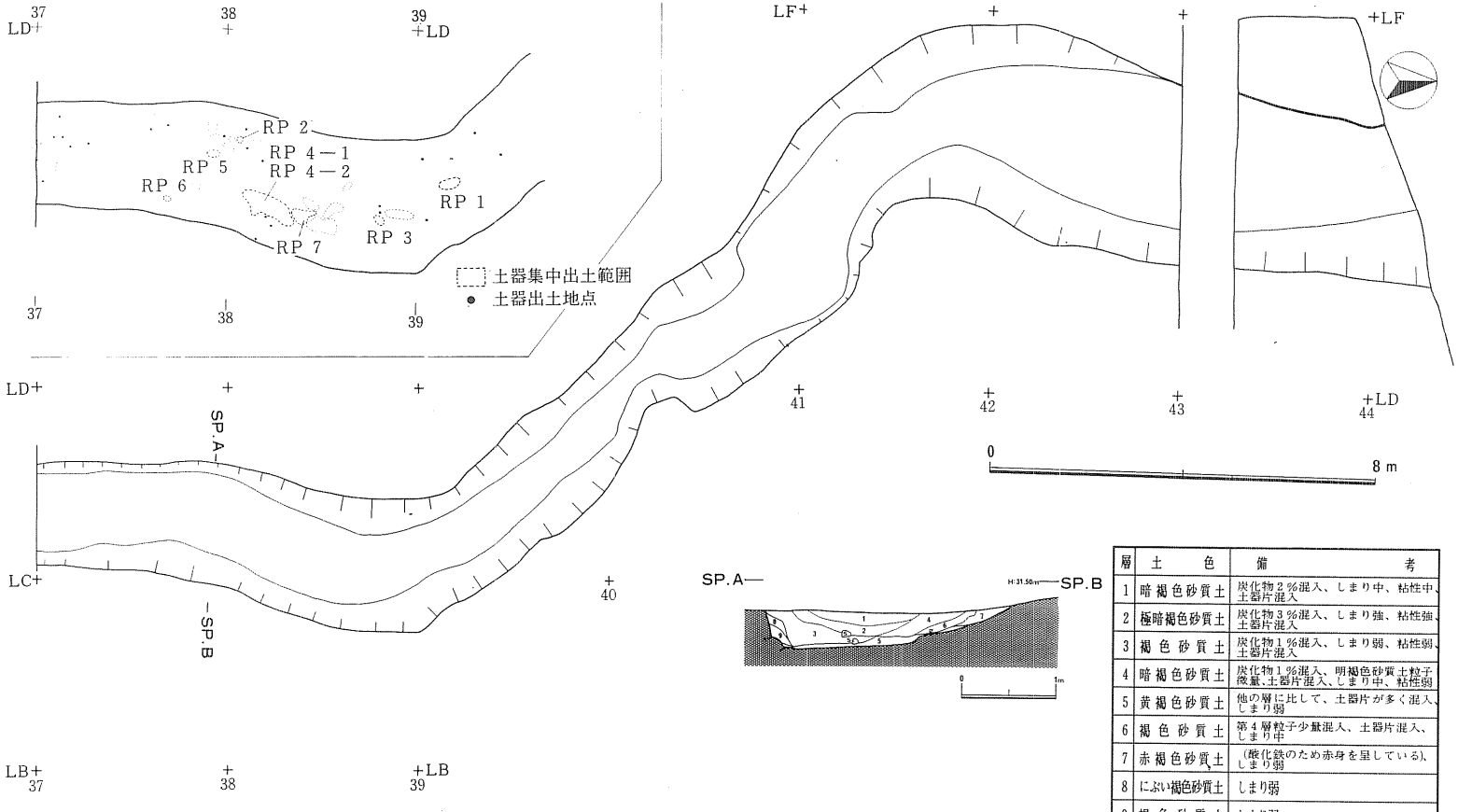
第５図　ＳＩ12　竪穴住居跡

土である。底部は平滑である。20～23は楕円形かそれに近い形状をもつ石で長さ 7.9～11.3 ㎝である。周縁か側縁に磨滅痕があり、両先端部に敲打痕を有するものもある。石質はいづれも安山岩で、床面からの出土である。他に図示できなかったが、カマドの脇から鉄滓２点が出土している。

（２）溝跡

ＳＤ05　溝跡（第７図）

ＬＣ37～40、ＬＤ40～44、ＬＥ41～44グリッドに位置し、第Ⅱ層上面で検出した。南北に「Ｓ」字状に伸びており、全長30.9ｍ、上面幅1.5～4.2ｍ、底面幅0.5～3.0ｍ、深さ0.15～0.57㎝である。底面には砂を取込むようにしてできた酸化鉄のかたまりが配石のようにブロック状にできており、その上から多くの土師器、須恵器の細片が出土した。その傾向は、ＬＣ37、ＬＣ38



層	土　色	備　考
1	暗褐色砂質土	炭化物2％混入、しまり中、粘性中、土器片混入
2	極暗褐色砂質土	炭化物3％混入、しまり強、粘性強、土器片混入
3	褐色砂質土	炭化物1％混入、しまり弱、粘性弱、土器片混入
4	暗褐色砂質土	炭化物1％混入、明褐色砂質土粒子微量、土器片混入、しまり中、粘性弱
5	黄褐色砂質土	他の層に比して、土器片が多く混入、しまり弱
6	褐色砂質土	第4層粒子少量混入、土器片混入、しまり中
7	赤褐色砂質土	(酸化鉄のため赤身を呈している)、しまり弱
8	にぶい褐色砂質土	しまり弱
9	褐色砂質土	しまり弱

＊第5層から第9層までは、ほとんど粘性がなく、さらさらしている。

第7図　SD05　溝跡

グリッドに著しく認められた。

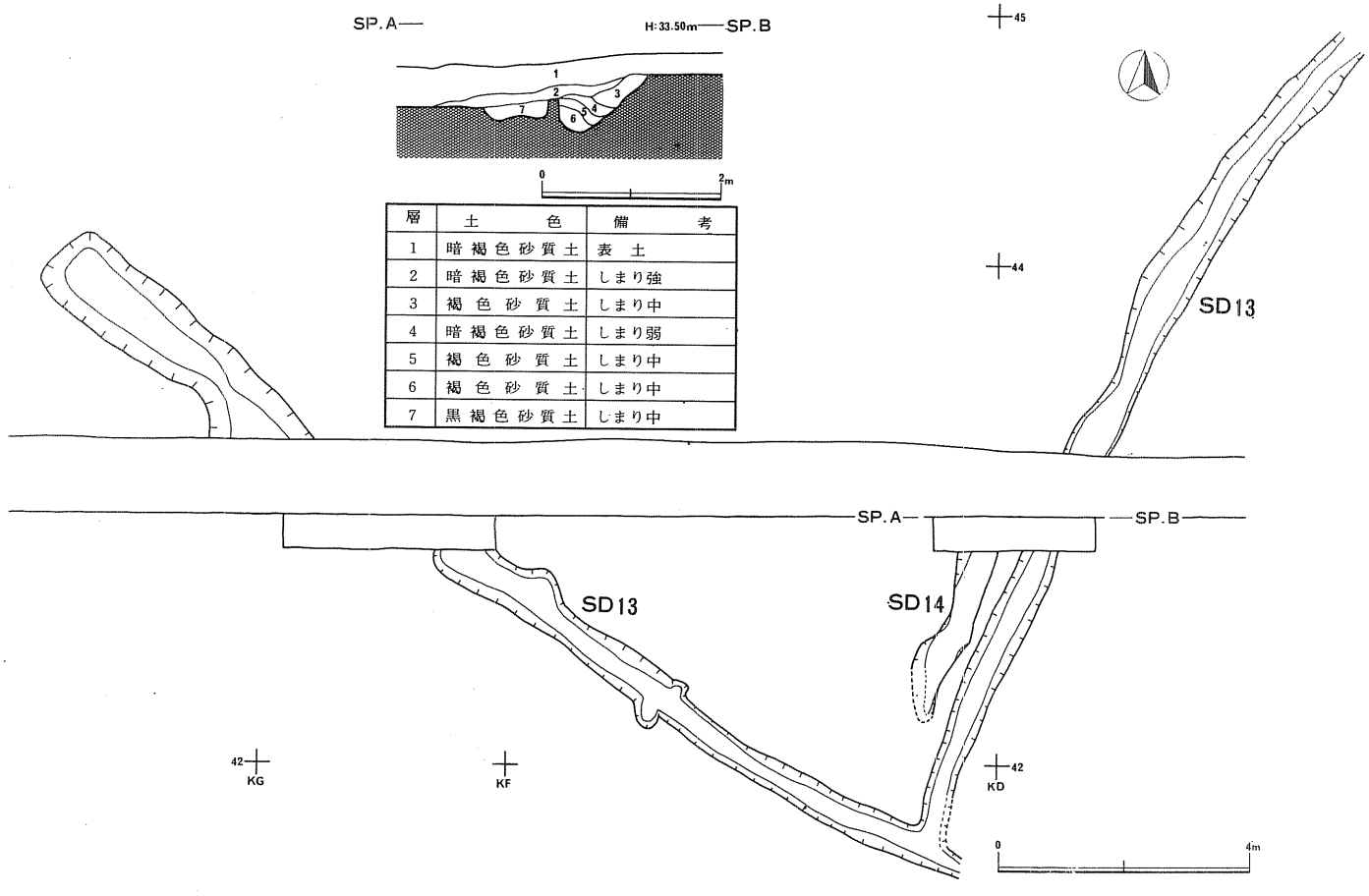
土層の堆積状況は断面観察によれば「凹」状を呈し、土層の攪乱も見られず、自然に埋没した状態を呈する。また遺物の出土状況をみてみると細片が多く、土器個体間相互のまとまりがない事などから、溝が埋没してゆく過程で、破損して不用になった遺物を投棄したものであろうと推察される。

出土遺物（第17～20、37図、第10表）

24～36は須恵器杯で、24～34は底部が回転ヘラ切りである。24、25は口径12.0㎝未満の小形の杯である。26～32は口径12.0㎝から13.0㎝の中形の杯である。28、29は体部下端にヘラケズリを施しているが、29は器肉が薄く、胎土、焼成とも良好で、外面に自然釉が残り、他の杯に比較して大変軽く、洗練されており、おそらく他地域からの搬入品であると思われる。33は口径14.4㎝と大ぶりな杯で、34も同じ仲間であろう。39、41は須恵器壺、40、42～44は須恵器甕で、いずれも溝底面出土である。45～49は土師器杯である。51はロクロ形成の土師器甕で、底部は静止糸切りである。

52、54～63、65～68は土師器鉢の製塩土器と考えられるもので、外面は全て粘土紐の巻上げ痕を有し、内面の多くに刷毛目がある。色調は赤褐色か橙色を呈する。いずれも溝底面出土である。55～58、62、63は口縁部で、いずれも外反しており、55、56、58のように口頸部より口唇部が薄くなるものや、57、62、63のように、口頸部と同じ厚さで口唇部を平滑かそれに近い形に成形しているものもある。52、54、65～68は底部で、52、65、66は底面に板目状の圧痕があり、他は平滑である。69～72は叩き目のある土師器甕でいずれも溝底面出土である。69～71の外面は平行なタタキ目、内面は同じく平行なアテ具痕が残り、69、70の外面には平行なタタキ目の条がはっきり観察できる。73は現存部の長さ8.7㎝、幅6.7㎝、厚さ1.0㎝の土版状を呈するもので、片面に刻線を有するがその意味は不明である。溝底面出土である。

74は長さ3.7㎝、幅1.4㎝の有茎式の縄文時代の石鏃で覆土からの出土である。75～77は砥石でいずれも折損しているが、75の幅は3.9㎝である。石質は安山岩である。78～81は楕円形かそれに近い形状で、全側面もしくは部分的に擦った痕跡が残る。長さは9.7㎝～11.0㎝で、石質はいずれも安山岩である。これらの石は縄文時代に普遍的に見られる敲石と同じ形態であるが、ＳＩ12　竪穴住居跡の床面などからも出土しており、そのことから古代の土器と同じ時期の所産であろうと考えられる。ＬＤ43グリッドの溝確認面のやや下から銅銭12枚が重なって一括出土（第39図）している。その出土地区、銭名、初鋳年等は第10表の通りである。一括出土した中で年代が一番新しい銅銭は、247の氷楽通宝（初鋳年　1408年）であることから、それ以降に埋ったものと判断される。



層	土　　色	備　　考
1	暗褐色砂質土	表　土
2	暗褐色砂質土	しまり強
3	褐色砂質土	しまり中
4	暗褐色砂質土	しまり弱
5	褐色砂質土	しまり中
6	褐色砂質土	しまり中
7	黒褐色砂質土	しまり中

第８図　ＳＤ 13・14　溝跡

ＳＤ13　溝跡（第８図）

本溝は南北に走るものと東西に走る２本の溝からなり、ＫＤ41グリッド内でほぼ直角に交わる。第Ⅱ層上面で検出した。東西に走る確認出来た溝の規模は、全長 14.50ｍ、上面幅 0.44～0.88ｍ、底面幅 0.24 ～ 0.46ｍ、深さ 0.06～0.46ｍである。南北に走る溝の規模は、全長17.20ｍ、上面幅 0.49 ～ 1.24ｍ、底面幅 0.20 ～ 0.64ｍ、深さ0.04 ～ 0.12ｍである。溝内からの出土遺物はないが、周辺の同一レベルで土師器が出土している事から、古代の遺構と思われる。

ＳＤ14　溝跡（第８図）

ＫＤ42内でＳＤ13の西側に位置し、ＳＤ13と平行する。第Ⅱ層上面で確認した。その規模は 2.92ｍ、上面幅 0.38 ～ 0.62ｍ、底面幅 0.34 ～ 0.45ｍ、深さ 0.14 ～ 0.60ｍである。溝内からの出土遺物はないが、ＳＤ13と同様周辺の同一レベルで土師器が出土している事から古代の遺構と思われる。

（３）炉跡

ＳＱ04　炉跡（第９図）

ＳＮ19の北東にあるＬＥ37グリッドの第Ⅱ層上面で検出した。西に焚口のある「コ」の字形の石組炉で、長さ16㎝～39㎝、幅10㎝～16㎝の長方形かそれに近い形をした溶岩性の石４個を中心にその間に小さい石を入れて構築しており、その遺存状況は大変良好であった。石組本体の規模は南北62㎝、東西52㎝で、炉底面には土製支脚を埋設し、焚口には焼土が見られた。炉のすぐ北脇には、長軸50㎝、短軸14㎝で楕円形のプランを有する焼土の薄い堆積があり、さらにその脇に長辺25㎝、短辺14㎝、厚さ２～３㎝で不整長方形のプランを有する灰白色土を検出した。

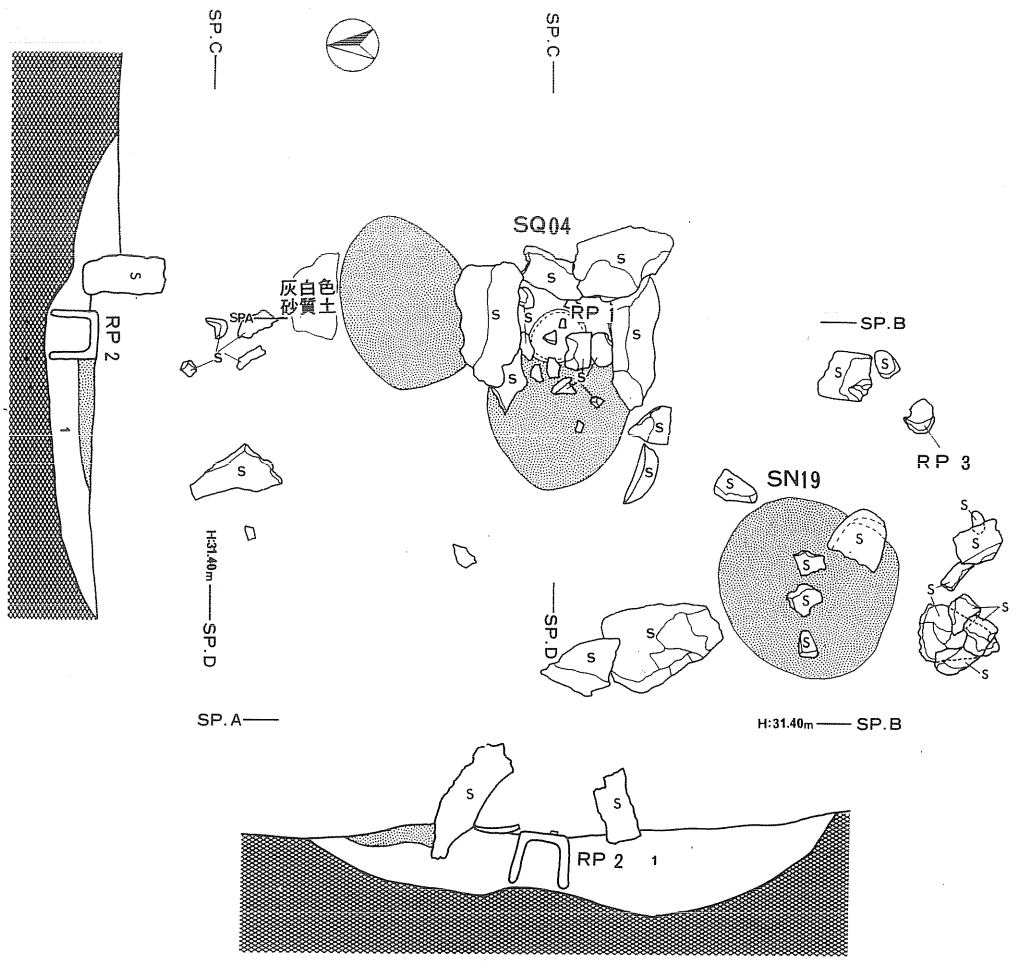
出土遺物（第21図）

82は炉底面に埋設されていた土製支脚で、内面下半部は部分的に赤褐色となっている。器肉は体部下半で 1.1 ㎝、上半で 1.8 ㎝で体部下端で 1.3 ㎝とやや肥厚している。83～85は土師器甕で、83はロクロ使用のもので底部は静止糸切りである。84、85は非ロクロである。87～96は製塩土器と思われる。いづれもにぶい黄橙色か浅黄橙色で94、96の底部には板目状の圧痕がある。

（４）その他の遺構

ＳＸ01（第10図）

ＬＧ39～42グリッドに位置し、第Ⅱ層上面で検出した。全容は不明であるが、南北に直線的にＳＸ15と平行して伸びており、暗褐色砂質土が土間のように堅くしまっている。土層断面図の観察によると、ＳＸ15よりも古い。その規模は全長 15.5 ｍ、幅 0.30 ～ 0.58ｍで厚さ 0.01～0.07ｍである。



層	土　色	備　考
1	褐色砂質土	しまりやや良

0　1m

第９図　ＳＱ04　炉跡・ＳＮ19　焼土遺構

出土遺物（第22図）

97は須恵器杯で、底部はヘラ切り離しである。98は短頸壺、99～102は須恵器甕である。103～105は製塩土器と思われ、いづれも内外面ともにぶい橙色である。105は胴部で最大径40.4㎝である。

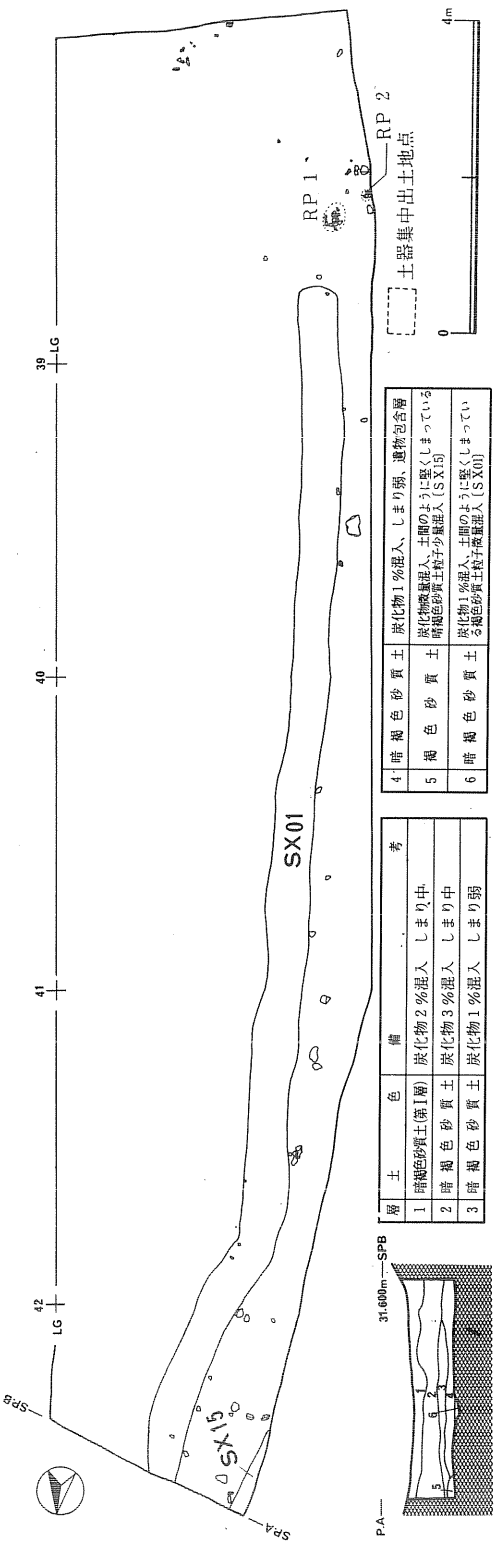
ＳＸ11（第11図）

ＫＨ38～40グリッド周辺に位置し、第Ⅱ層上面で検出した。規模は南北9.38ｍ、東西6.94ｍ、深さ0.05～0.60ｍで、東側が深く、西側にいくにつれて浅くなり、断面形はレンズ状に近い形状を呈する。南端部は末調査で全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈するものと推定される。南東端には長軸54㎝×短軸42㎝、厚さ６㎝の焼土があり、周囲および上面から多くの土師器杯、製塩土器の他に、底部を再利用した土師器高台付杯（内面黒色処理―第24図141）や、鼓状の土製支脚（第26図157）が出土している。また、土層断面の観察によれば、東側で第Ⅲ層上面から幅0.48ｍ、深さ0.28ｍの暗褐色の掘込みが見られたが、その性格は不明である。

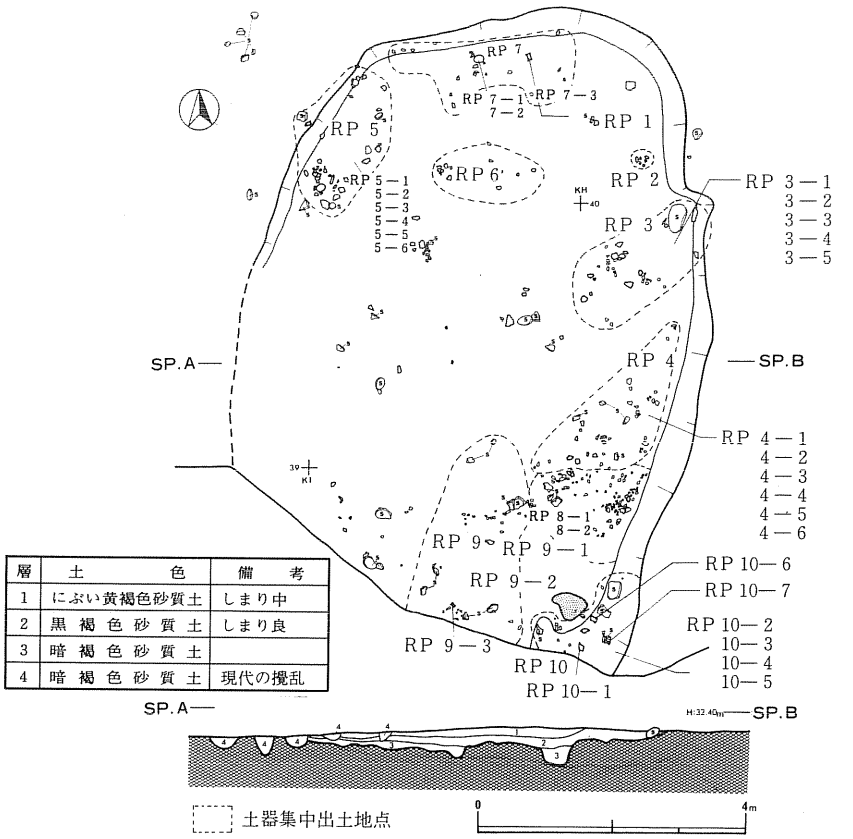
出土遺物（第23～28図）

106～108、110は須恵器杯で107は回転ヘラ切り後、底部が回転ヘラケズリにより調整され切り離し痕跡がわずかに残るのみである。109は須恵器の口縁部で、器種は長頸壺かと思われる。111、112は短頸壺、113は須恵器甕である。

114～134は土師器杯で、いづれも底



第10図　ＳＸ01・ＳＸ15



第11図　ＳＸ11

部は回転糸切りで、二次調整はなく、口縁部に比較して底径が小さく、底部から口縁部にかけてゆるやかに立上る。色調はにぶい黄橙色や橙色かそれに近い色である。122～125は口径13.2㎝～13.9㎝未満の中形の土器である。126～129は口径14.4㎝以上と大ぶりな土器である。135、142は土師器高台付椀で、内面に丹念な不定方向のヘラミガキを施す。135は内面黒色処理で、底部は回転糸切り後、底部外縁に高台を付し、中央をのぞき回転ヘラケズリを施し、それによって高台は外に踏んばるように斜めになり、底面中央の高さは高台接地面とほとんど変らない。体部外面には回転ヘラケズリを施す。142は135と似たような特徴をもつが、内外面に丹塗りを施す点で違いがある。142、135とも土師器杯と比べて、器肉が厚く、色調もにぶい黄橙でやや暗く、焼成は良好である。141も土師器高台付椀と思われるが、底部を打ち欠いて円形に調整して、再利用したようである。143は土師器杯で体部に墨書が見られるが、細片のため判読できない。136～140はロクロ形成の土師器甕で136、137、139は回転糸切り、138は底部全体を静止糸切り後、底部周縁に少なくても３回の糸切りをしたものと思われる。144、145、147、161～163は非ロクロの土師器甕である。144、145は小形で、145は外

面に刷毛目→ヘラケズリの調整を施し、内面には黒色の付着物が見られる。144も同一器種と思われ、底部は平滑に仕上げている。147は大形で、144、145と同一の胎土・色調・焼成・調整技法であるが、口縁部は「く」字状に外反し、底部にはわずかに細砂粒が見られる。胴部内面には部分的に黒色の付着物が残る。149、150も同一器種の底部であろう。146は145と似た器形であるが、外面は粘土紐の巻上げ痕が明瞭に残り、胎土もやや荒いことから製塩土器と思われる。148、151、155、164も同じ仲間と思われ、148、151の底部には板目状の圧痕が見られる。152～154、165は土製支脚で、いづれも粘土紐の巻上げ痕が明瞭に残り、胎土は砂粒を多く含み、二次火熱を受け赤変している部分が多い。152、154は体部下端に指による成形痕が残り、152は上面中央に穴があいていたもののようだ。156～159は鼓状の土製支脚で、いづれも胎土は砂粒が混入して荒く、色調は二次火熱を受け赤変している部分が多く、全体的に指による成形痕が明瞭に残る。158は全体に、他は部分的に灰白色物質が付着している。

168～184は所謂「タタキ目のある土師器甕」と呼ばれているもので、胎土は精選され、にぶい橙色か橙色を呈し、焼成も大変良好である。そしていづれも外面は平行なタタキ目、内面は胴部下半に平行当て具痕を残し、胴部上半に横ナデ、刷毛目を施している。器形は170、174、181の底部破片からわかるように砲弾形と思われる。166、167はタタキ目のある土師器甕の口縁部であろう。160はほぼ全面に擦った痕跡のある石で、石質は安山岩である。

ＳＸ15（第10図）

ＬＧ39～42グリッドの第Ⅱ層上面で検出した。ほんの一部の検出であるが、ＳＸ01とほぼ平行に南北に伸びるものと推定される。その規模は、全長1.10ｍ、幅0.40ｍ、厚さ0.01～0.08ｍで、褐色砂質砂が土間のように堅くしまっている。土層断面の観察によるとＳＸ01よりも新しい。出土遺物はない。

（５）土壙

ＳＫ02　土壙（第12図）

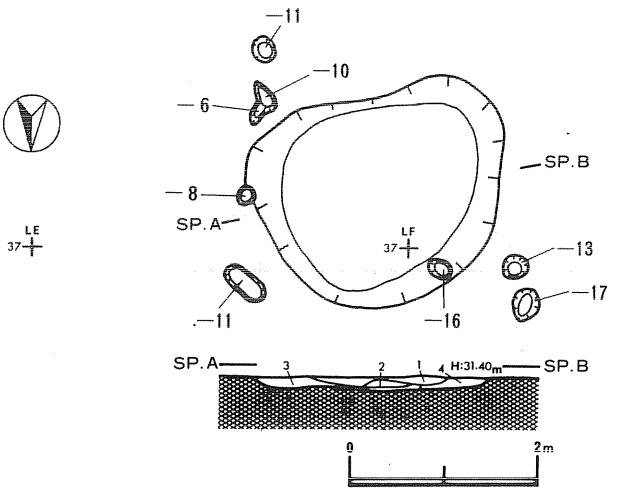
ＬＥ36・37、ＬＦ36・37グリッドの第Ⅱ層上面で検出された。その規模は長軸2.7ｍ、短軸2.46ｍ、不整円形で、深さ0.15ｍの浅皿形を呈する。周囲のピットは本遺構に伴うかどうかは判然としなかった。出土遺物はない。

（６）焼土遺構

ＳＮ03　焼土遺構（第３図）

ＳＮ16の北西隣、ＬＧ37グリッドの第Ⅱ層上面で検出した。長軸0.81ｍ、短軸0.63ｍの楕円形で焼土の堆積はなかった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ06　焼土遺構（第13図）



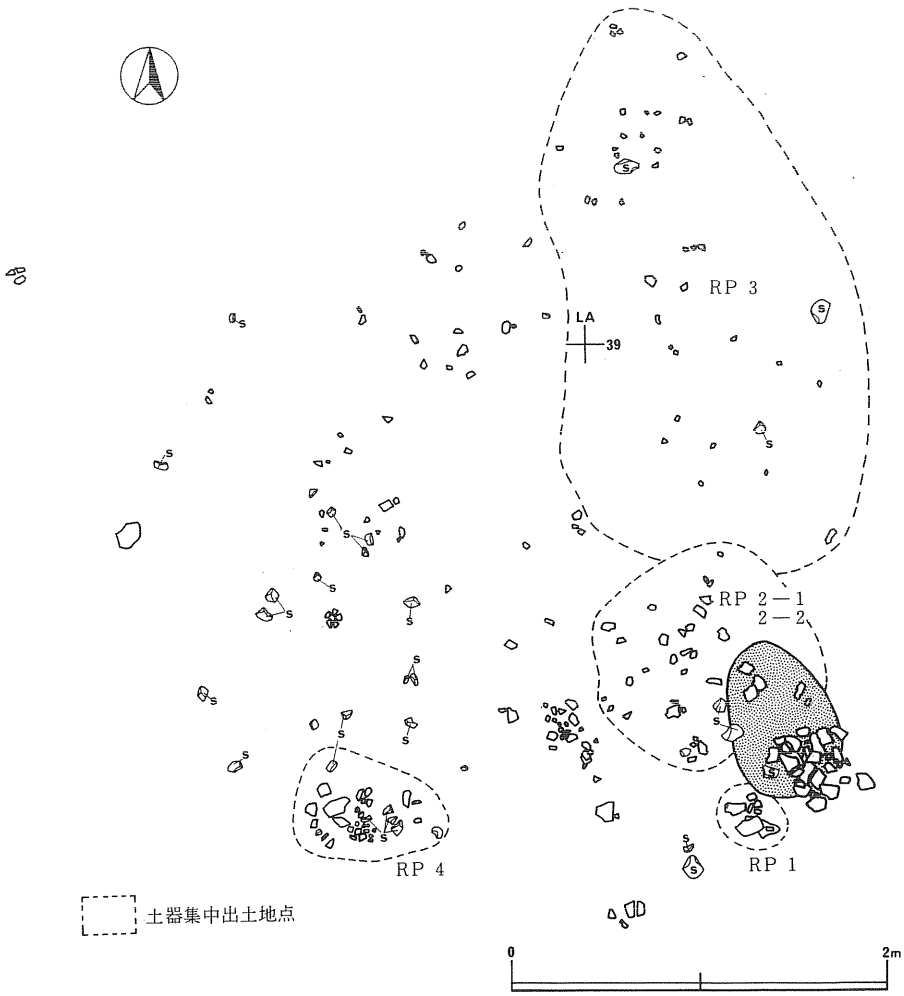
層	土　　色	備　　考
1	黒　褐　色　砂　質　土	
2	にぶい赤褐色砂質土（焼砂）	黒褐色砂質土との混土層
3	暗　褐　色　砂　質　土	
4	褐　色　砂　質　土	

第12図　ＳＫ02　土壙

ＫＪ38グリッドに位置し、第Ⅱ層上面で検出した。その規模は長軸 0.80 m、短軸 0.60 m の楕円形で、厚さは 0.05 m である。主に本遺構の北、西から多くの土器片が出土したが、それは南北 5.38 m、東西 4.30 m の範囲に散布していた。土器が出土した面から近世の陶磁器や現代のビニール片などが出土し、部分的に現代の攪乱を受けている事が判明したが、攪乱の範囲や深さは砂地の為、明確に把握できなかった。

出土遺物（第29～31図）

185 ～ 187 は土師器杯、188 、198 はロクロ非使用の土師器甕、189 、190 はタタキ目のある土師器甕である。191 、192 は須恵器甕である。193 は横瓶でＳＤ05とＳＸ11のいずれも底面から出土のものと４点で接合した。外面は平行タタキ、内面はカキ目を施す。194 ～ 196、199 ～ 204 は土師器で、いずれも外面に粘土紐の巻上げ痕、内面全体に刷毛目調整を施し、器肉は平均 1.0 ～ 1.5 cm、厚いもので 2.2 cm もあり、胎土に砂粒を多く含み二次火熱により剝落しているものもあることなどから製塩土器と考えられる。194 、196 は口縁部で、194 は推定口径 29.8 cm、196 は同じく 40.4 cm と大形で、鉢形かそれに近い器形になるものであろう。197 は底部が欠損しているが擂鉢形と思われ、内面はほぼ全面に刷毛目、外面はヘラケズリ→刷毛目調整で、刷毛目は部分的に、口唇部にまでおよぶ。底部外縁にはヘラケズリを施す、内面の胴上半部、外面の口縁部が部分的に二次加熱を受け、赤変している。外面に粘土紐の巻上げがないが、製塩土器と考えられる。205 は鉄製品で、両端が折損している。現在部の長さ 7.9 cm、幅 0.6 cm で断面形は正方形である。



第13図　ＳＮ06　焼土遺構

ＳＮ16　焼土遺構（第３図）

ＬＦ36グリッドの第Ⅱ層上面で検出された。その規模は長軸 0.46 m、短軸 0.37 m の不整円形で、焼土の厚さは 0.07 m である。遺物は出土しなかった。

ＳＮ17　焼土遺構（第３図）

ＬＦ37グリッドの第Ⅱ層上面で検出した。その規模は長軸 0.66 m、短軸 0.49 m の不整円形で、焼土の厚さは 0.08 m である。遺物は出土しなかった。

ＳＮ18　焼土遺構（第３図）

ＬＥ36グリッドの第Ⅱ層上面で検出した。その規模は長軸 0.94 m、短軸 0.65 m の不整円形で、焼土の厚さは 0.16 m である。ＳＮ17と同様、ＳＫ02　土壙上にあるが、レベルがＳＮ17よりやや高いことから、ＳＮ18よりも新しいと判断した。

出土遺物（第32図）

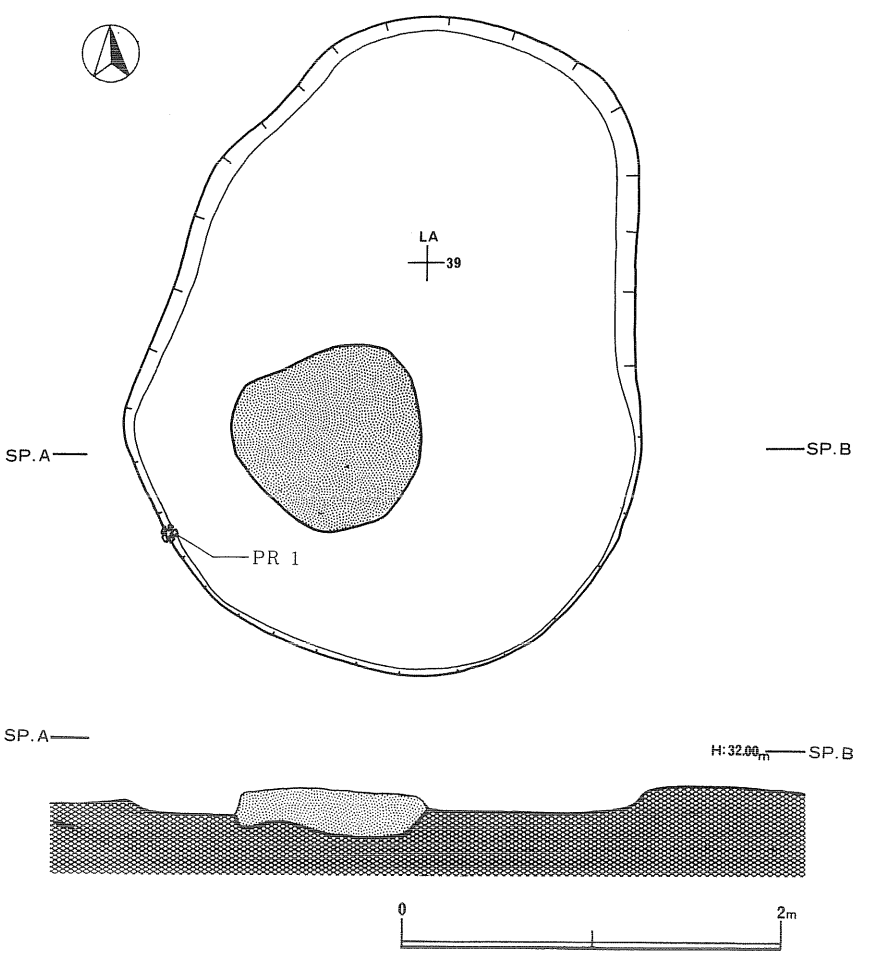
208は須恵器杯で回転ヘラ切り離しで二次調整はない。206、207は須恵器甕で、209～218はいずれも非ロクロの土師器甕である。

ＳＮ19　焼土遺構（第９図）

ＬＥ37グリッドで、ＳＱ04　炉の南面に位置し、ＳＱ04よりやや下のレベルで検出した。その規模は直径0.54ｍの円形で、焼土の厚さは0.15ｍである。出土遺物はない。

ＳＮ20　焼土遺構（第14図）

ＬＡ38グリッドに位置し、ＳＮ06　焼土遺構に伴う土器の採上げ後に検出した。本遺構は平面形が楕円形で、長軸3.50ｍ、短軸2.74ｍ、断面形が浅皿形で深さ0.06～0.12ｍであり、中に直径1.00ｍ、厚さ0.18ｍの円形を呈した焼土がある。



第14図　ＳＮ20　焼土遺構

出土遺物（第33図）

内外黒色処理した土師器杯（230）が１点出土した。器形は底部から緩やかに立上り、口縁部でやや内湾ぎみとなり、器肉が厚く、ずっしりした重量感がある。内外面ともヘラミガキの痕跡が良く見えないほど丁寧に調整されて、底面は平滑になっている。体部内面中ほどに、横ナデがわずかながら部分的に認められる。非ロクロ成形と思われる。

２　遺構外の出土遺物（第34図）

219、220は須恵器蓋で、220は天井部に回転ヘラケズリを施すものである。221、222は須恵器杯でいずれも高台を有し、底部は回転ヘラ切りである。223は土師器杯である。底部に墨書があるが、破片のため文字は判読できない。224～227は土師器甕で、224～226は非ロクロで、224は底部に木葉痕が残る。228、229は非ロクロの土師器甕と思われる胴部の破片で、内外面に縦、横、斜めに直線的な刻線が見られるが、その意味は不明である。228は暗褐色で、刻線はやや深く、229はにぶい橙色で刻線は浅いことから、別個体であろう。

第３節　その他の遺構と遺物

１　検出遺構

焼土遺構（第３図）

いずれも調査区の東端部の第Ⅱ層上面で検出したが、長芋の栽培などによると思われる攪乱が著しい。焼土およびその周辺から遺物が出土しなかったので時代を特定できない。

ＳＮ07　焼土遺構

ＪＩ42グリッドで検出した。長軸0.88ｍ、短軸0.21ｍ、焼土は暗赤褐色で厚さ約0.09ｍである。

ＳＮ08　焼土遺構

ＪＩ42グリッドで検出した。長軸0.6ｍ、短軸0.43ｍ、焼土は暗赤褐色で厚さ0.14ｍである。

ＳＮ09　焼土遺構

ＪＨ42グリッドで検出した。長軸0.50ｍ、短軸0.37ｍ、焼土は赤褐色で厚さ0.04ｍである。

ＳＮ10　焼土遺構

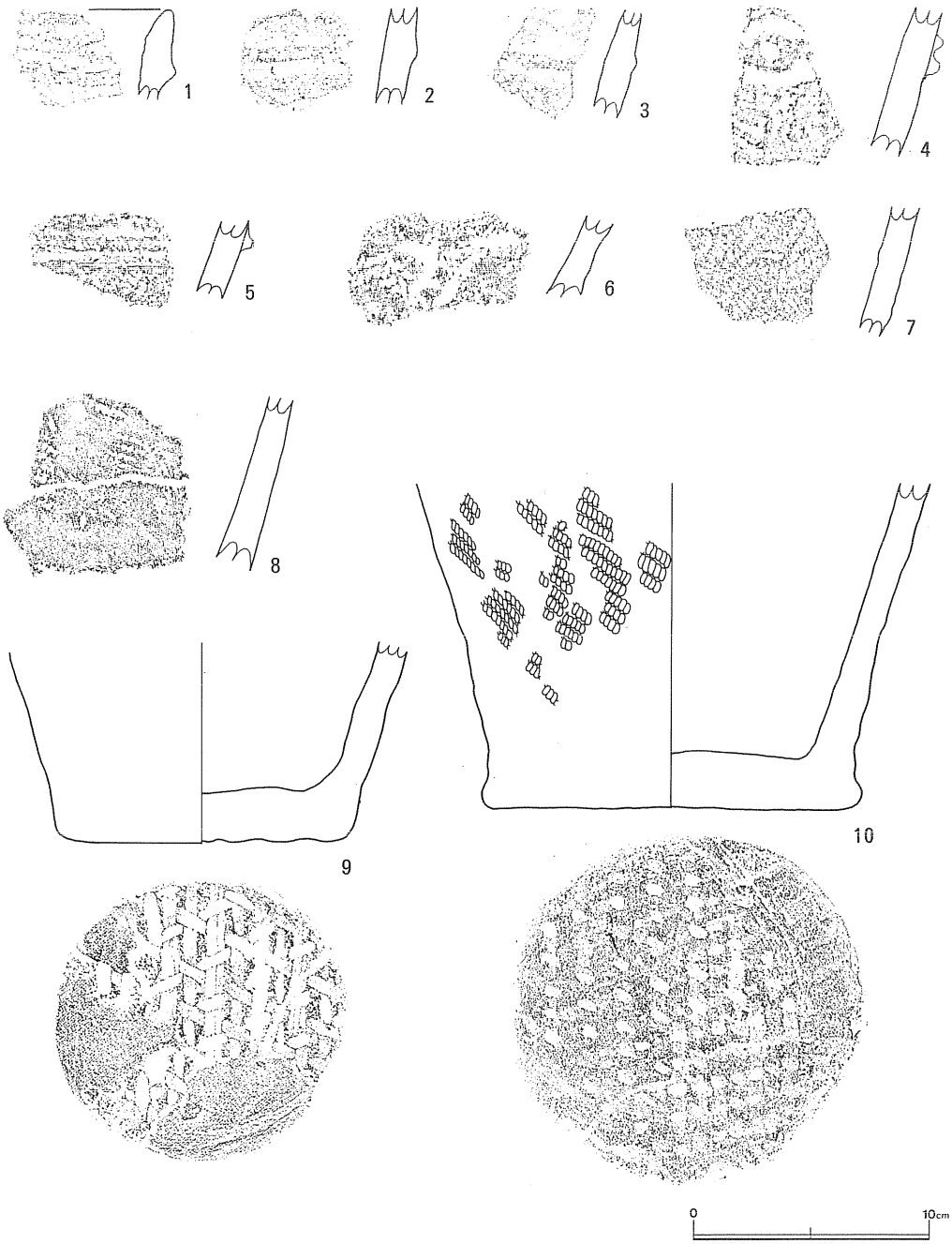
ＪＨ44グリッドで検出した。長軸0.33ｍ、短軸0.14ｍ、焼土は赤褐色で厚さ0.12ｍである。

２　出土遺物

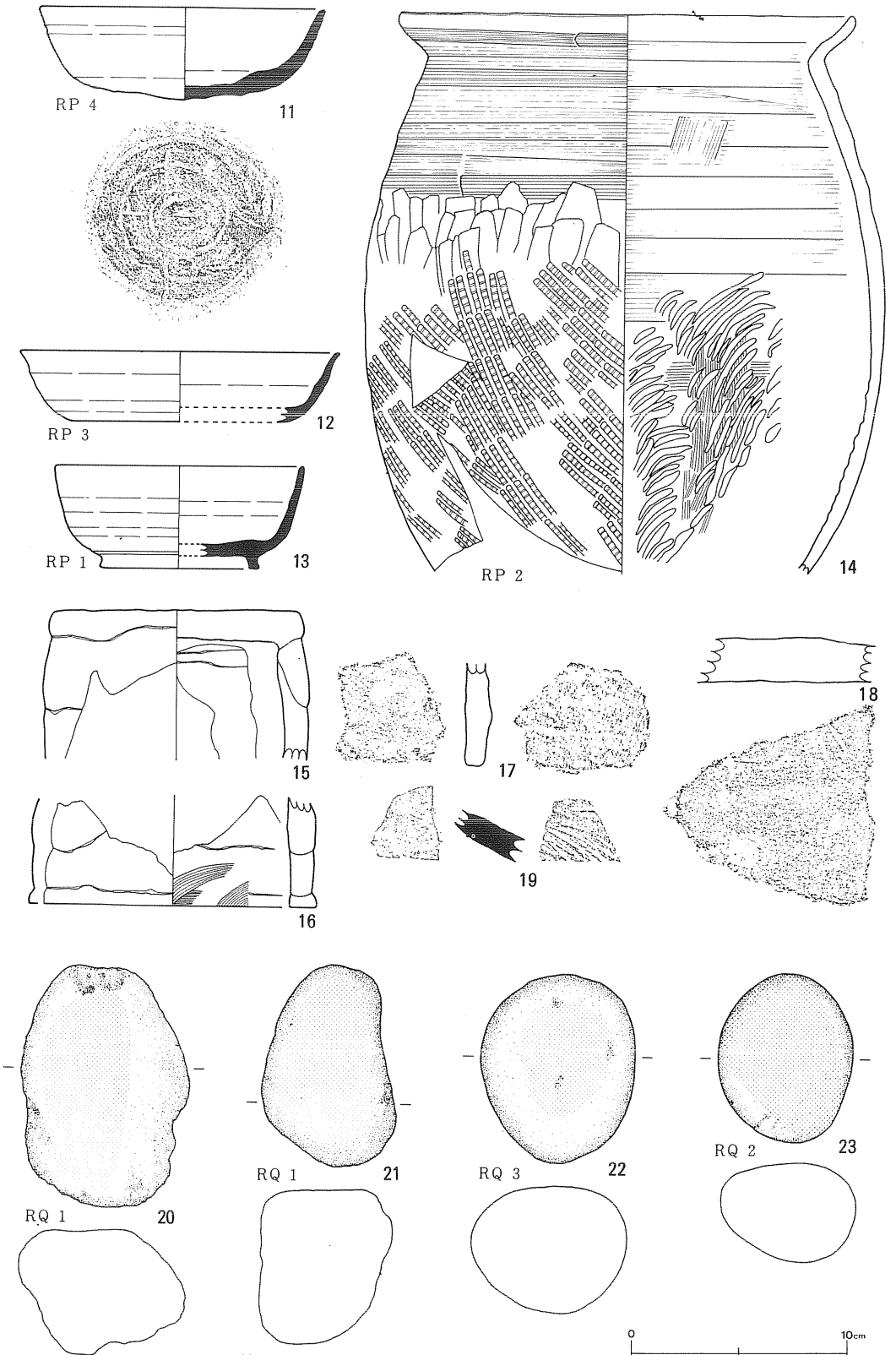
いずれも遺構外からの出土である。231～233（第35図）は珠洲系陶器で、内外面ともにぶい灰色を呈する擂鉢である。胎土はやや砂粒が多く、232、233は口縁がやや広くなり、櫛目文が緩い曲線となり、やや間のびした感じになることから、珠洲の第Ⅵ期（15世紀後半）に比

定される。

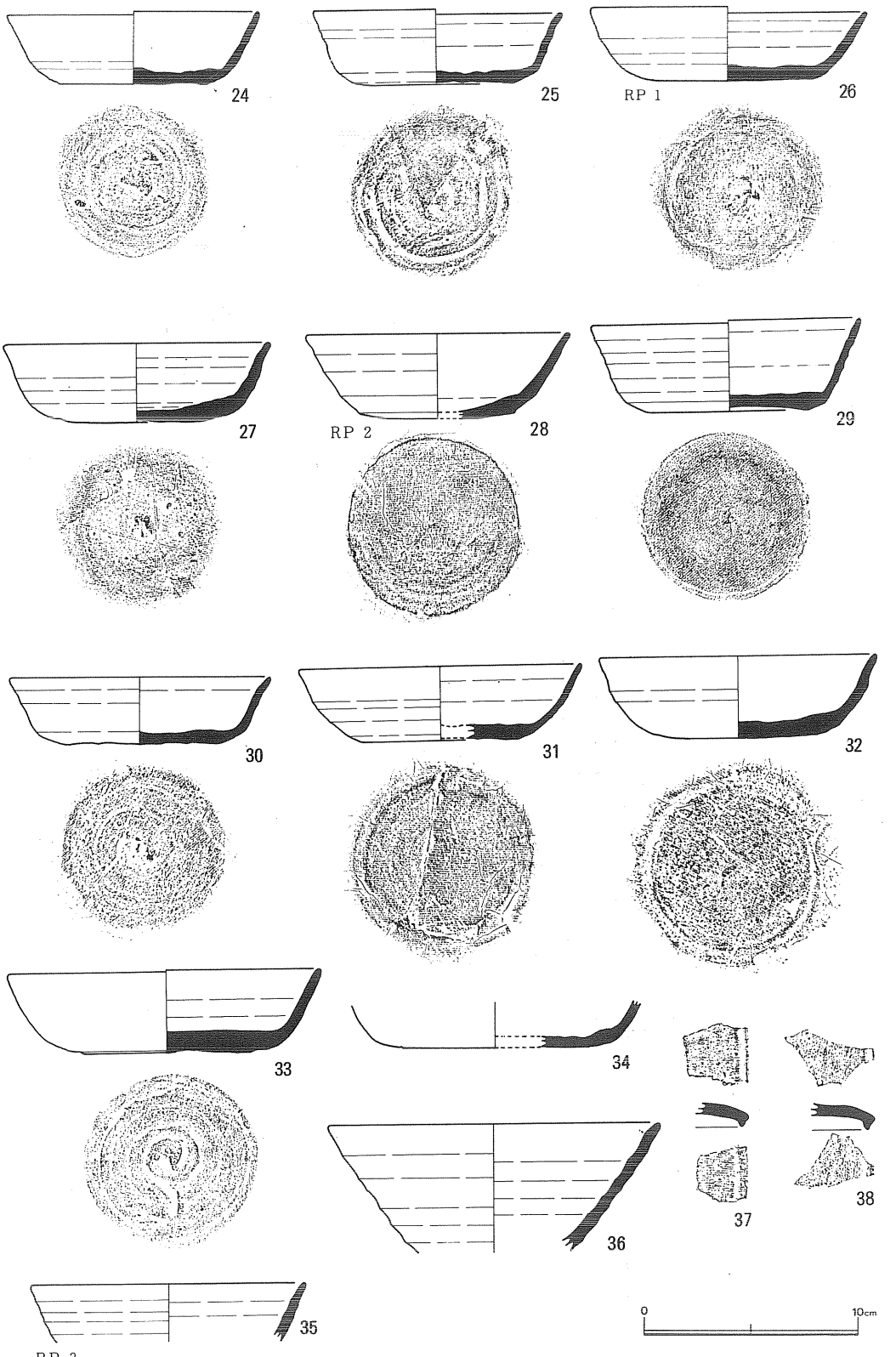
234（第36図）は椀で陶磁器である。見込み部に茶褐色の釉を施し、蛇ノ目高台をもつ。唐津系陶磁器で16世紀後半の所産であろうか。235は伊万里染付深皿で、内外に藍色の草花文を配し、「蛇ノ目凹型高台」を有する。18世紀以降の所産かと思われる。その他に古銭が４点（第37図、第10表）出土している。



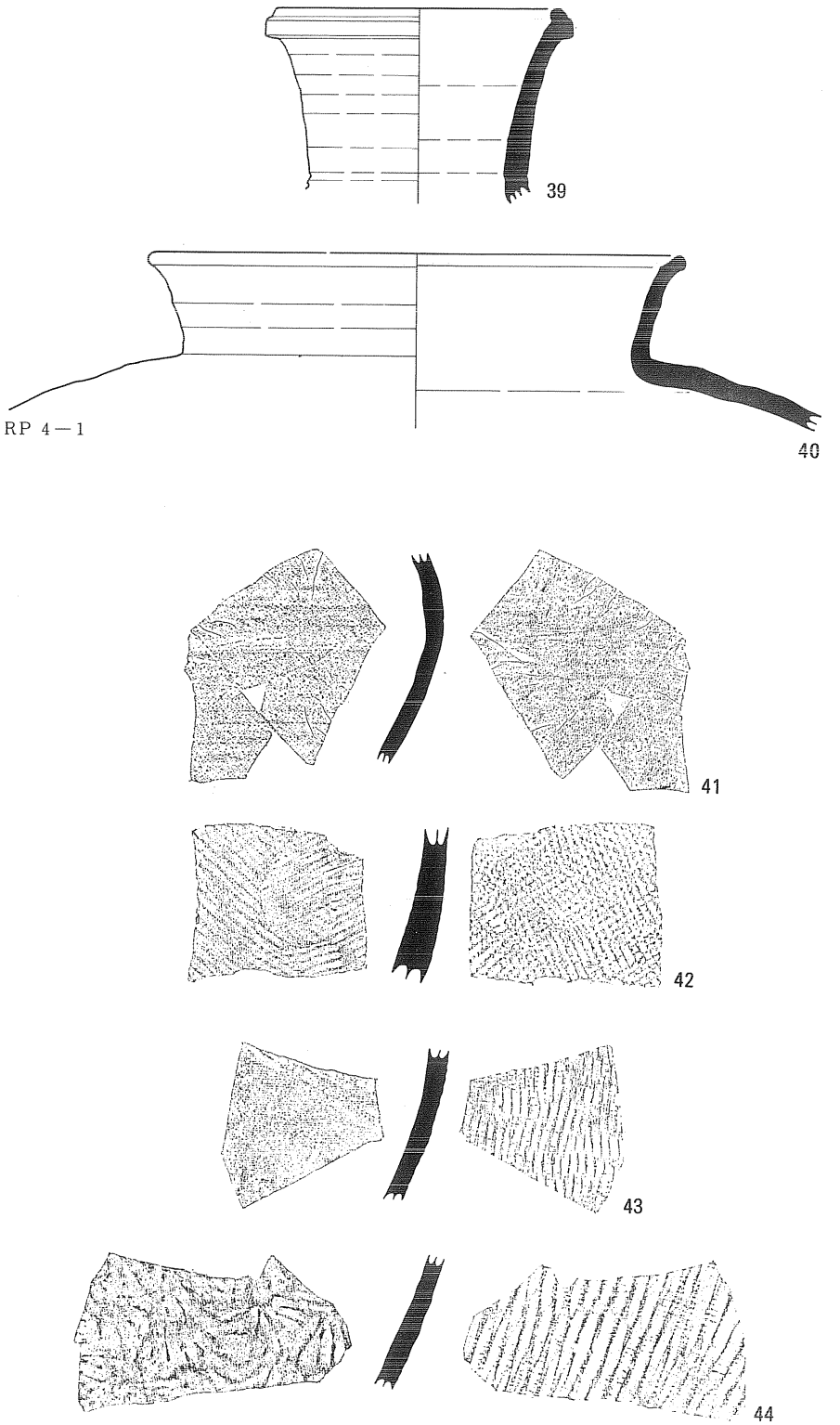
第15図　遺構外出土縄文土器



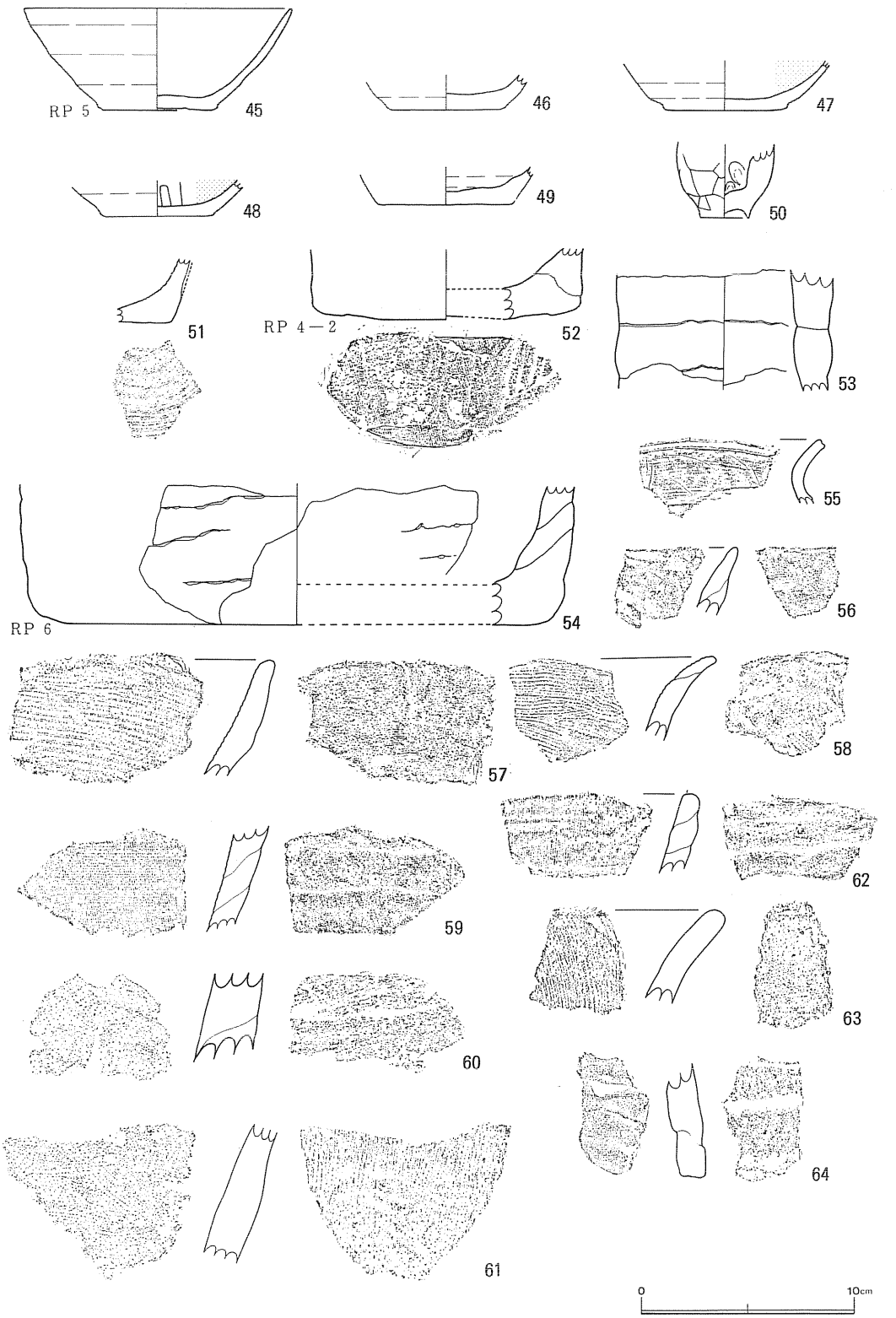
第16図　S I 12　竪穴住居跡出土遺物



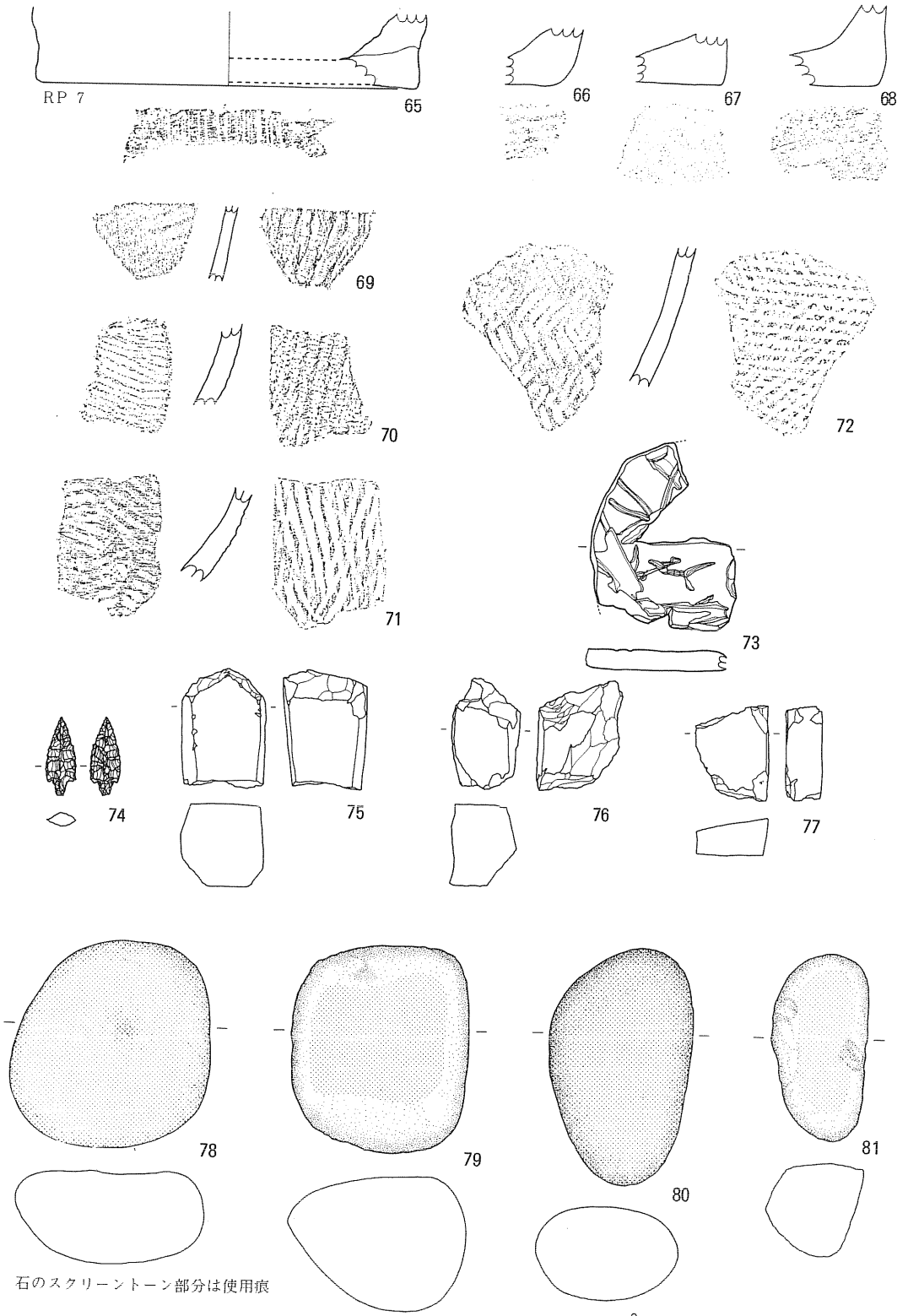
第17図　ＳＤ05　溝跡出土土器　(1)



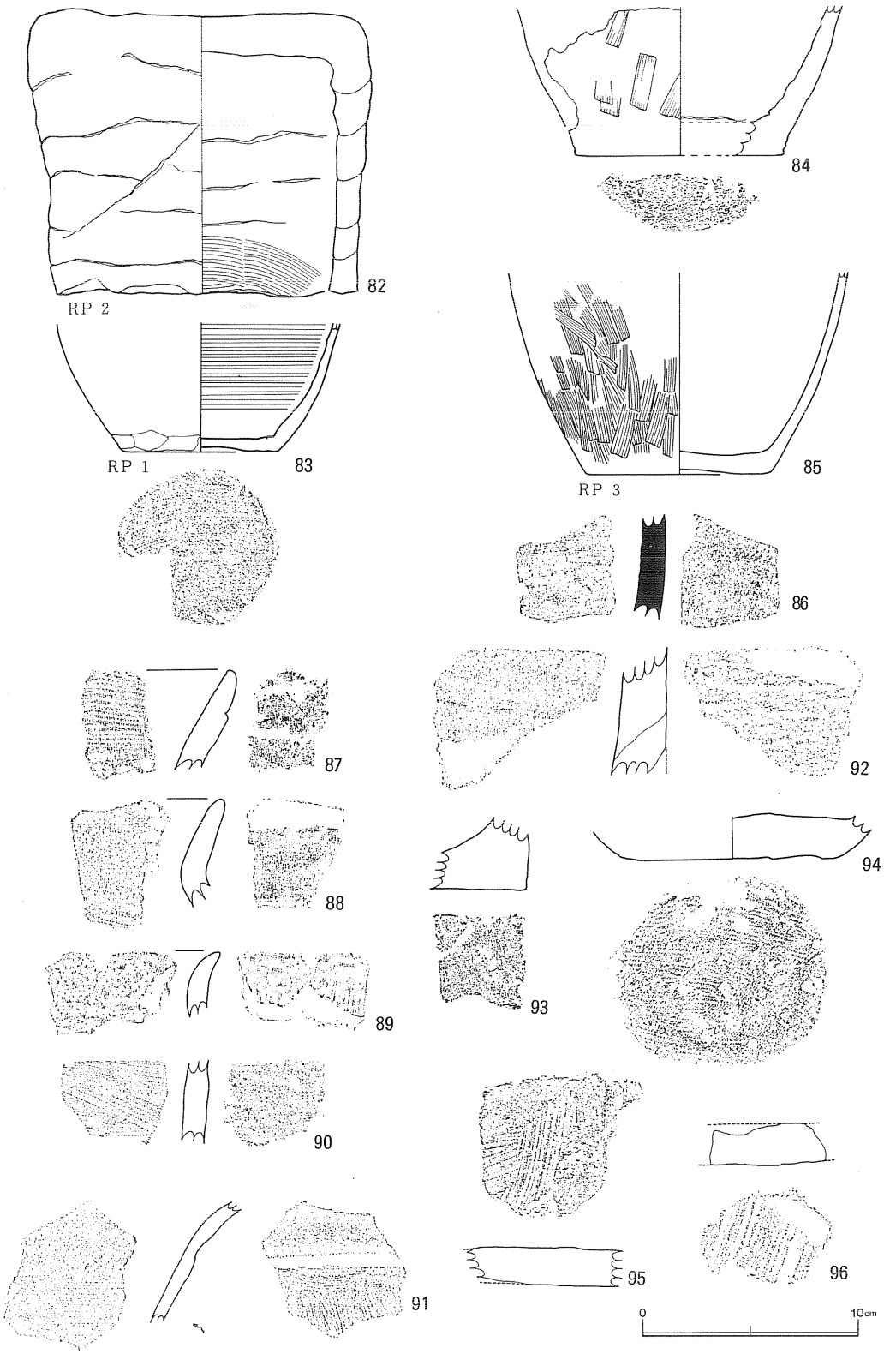
第18図　ＳＤ 05　溝跡出土土器　(2)



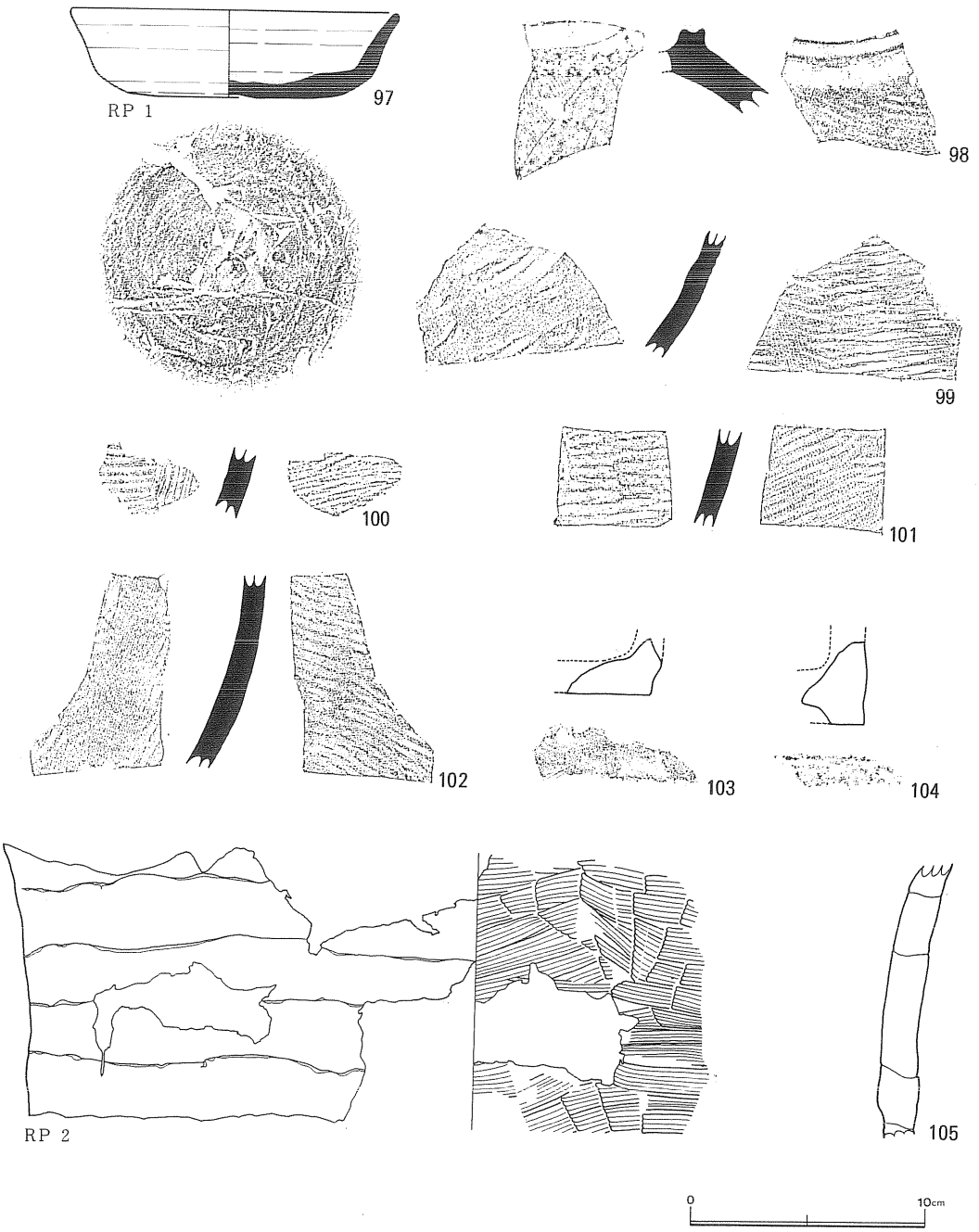
第19図　ＳＤ05　溝跡出土土器　(3)



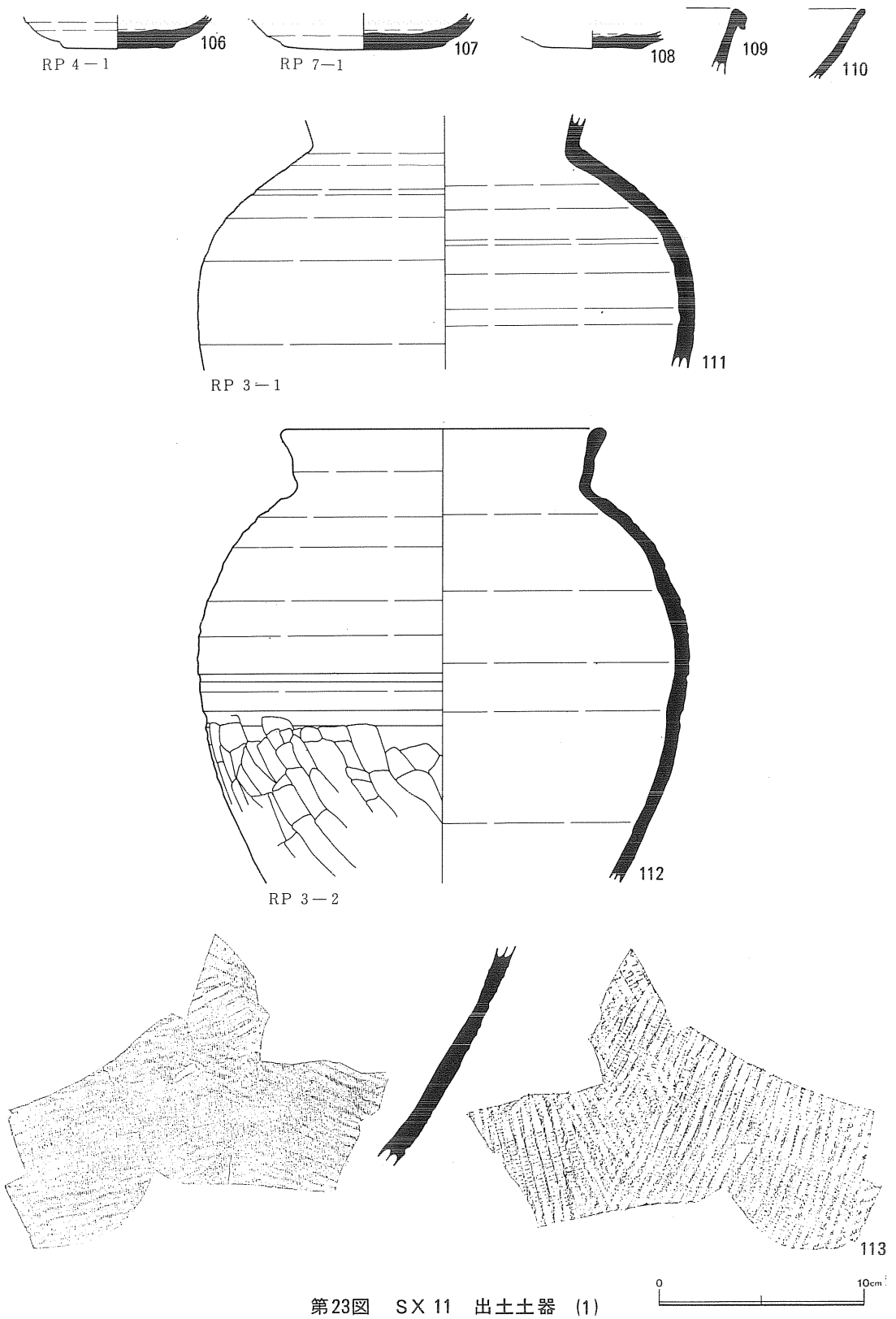
第20図　ＳＤ 05　溝跡出土遺物 (4)



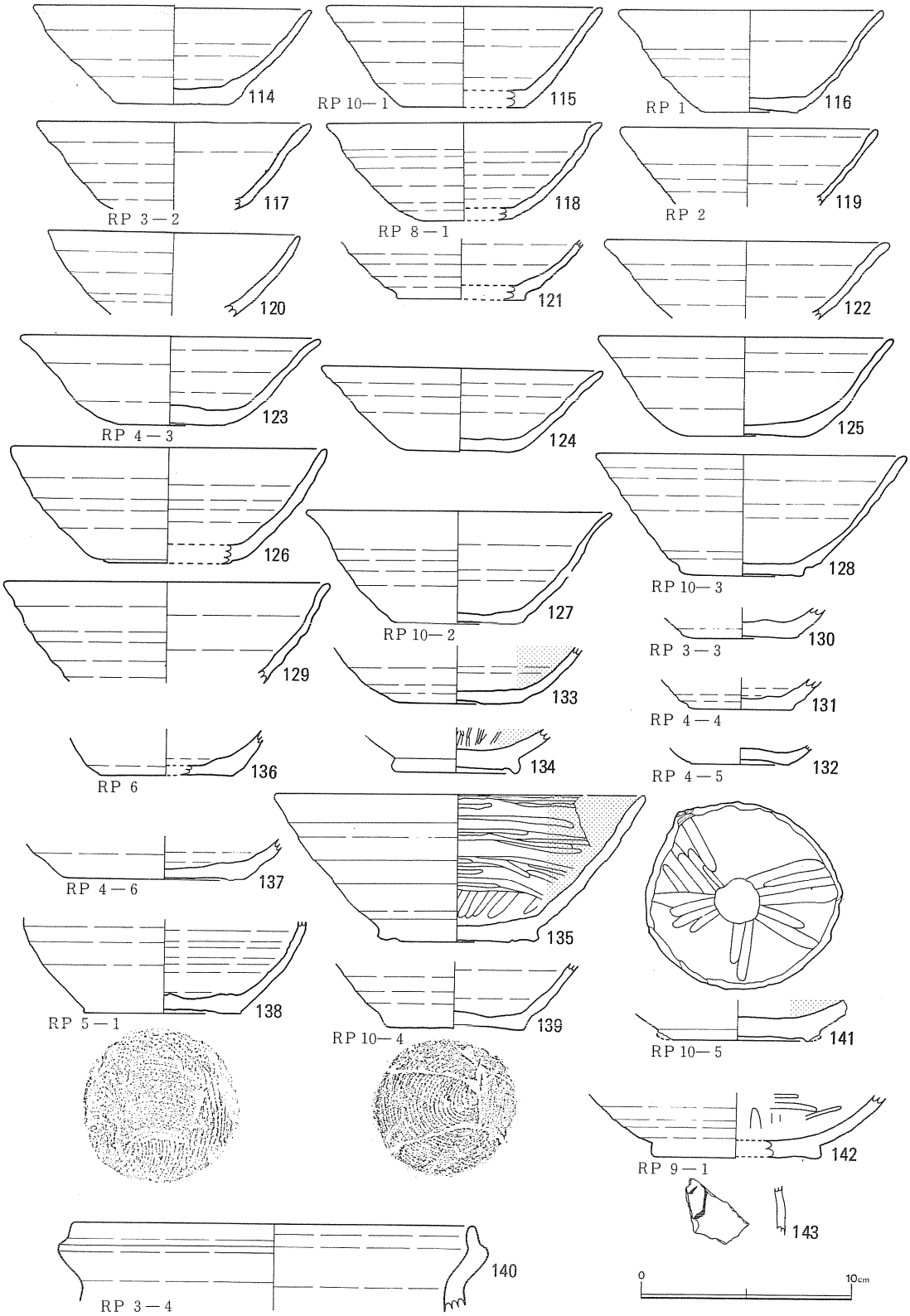
第21図　SQ 04　炉跡出土土器



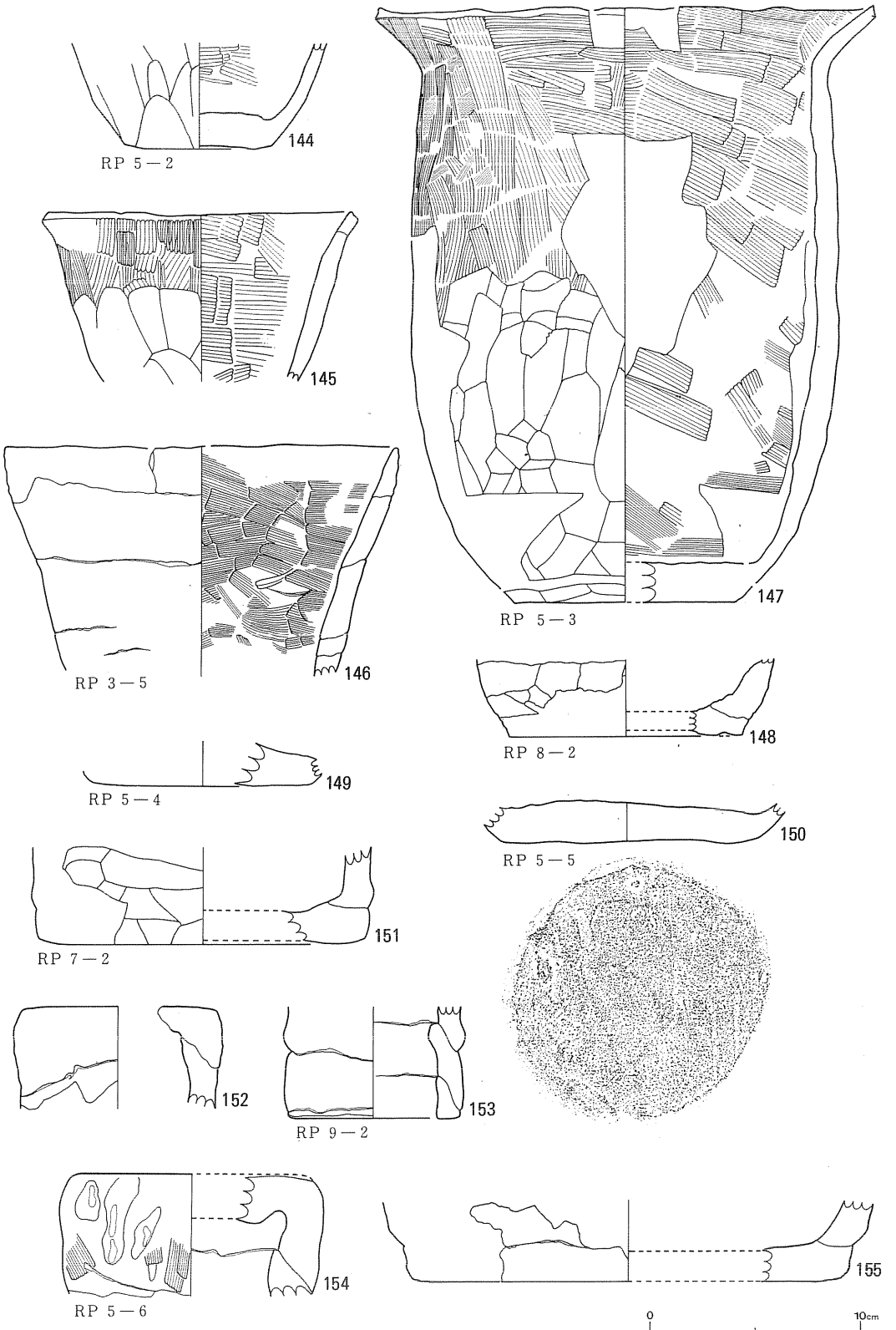
第22図　ＳＸ 01　出土土器



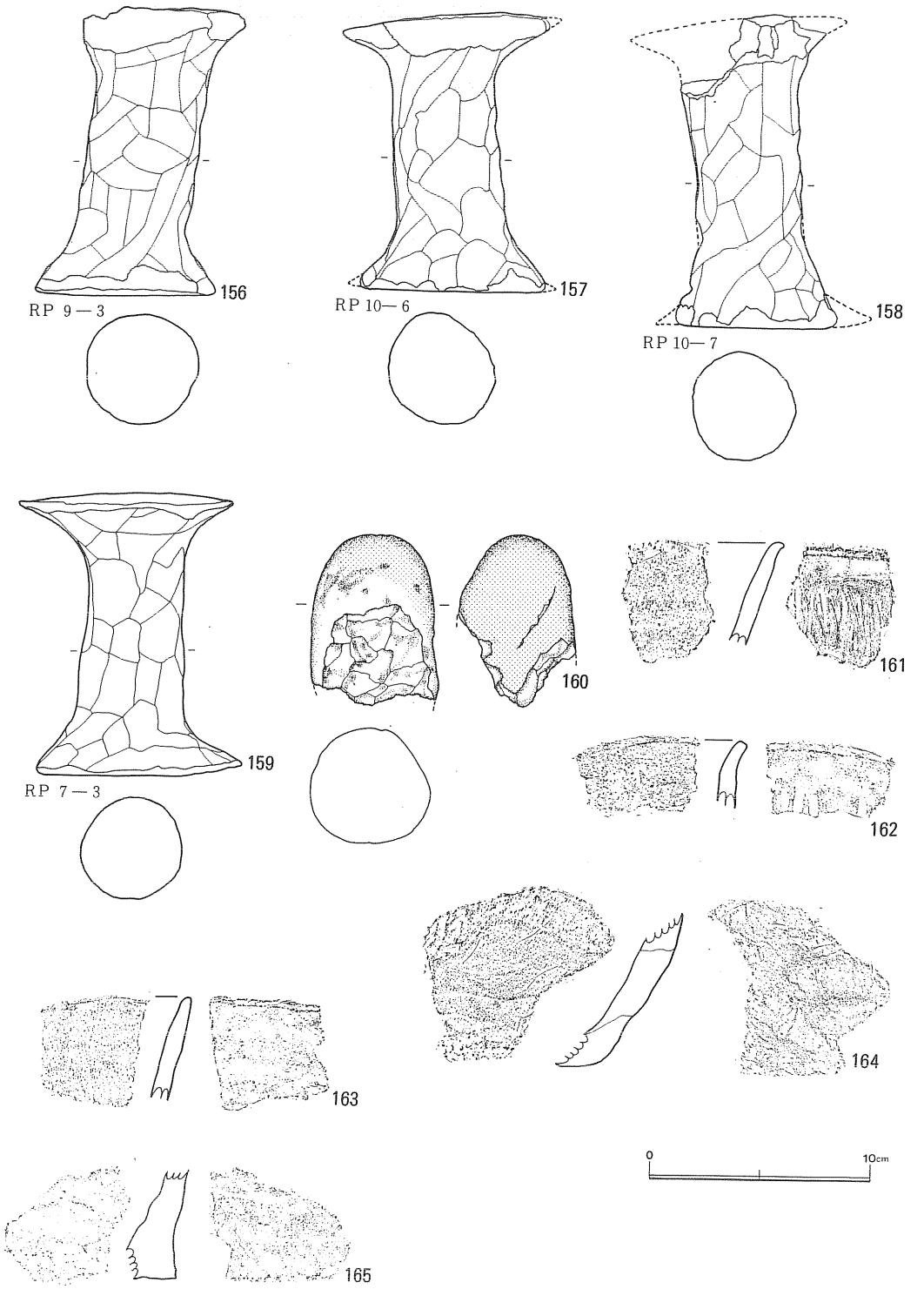
第23図　SX 11　出土土器 (1)



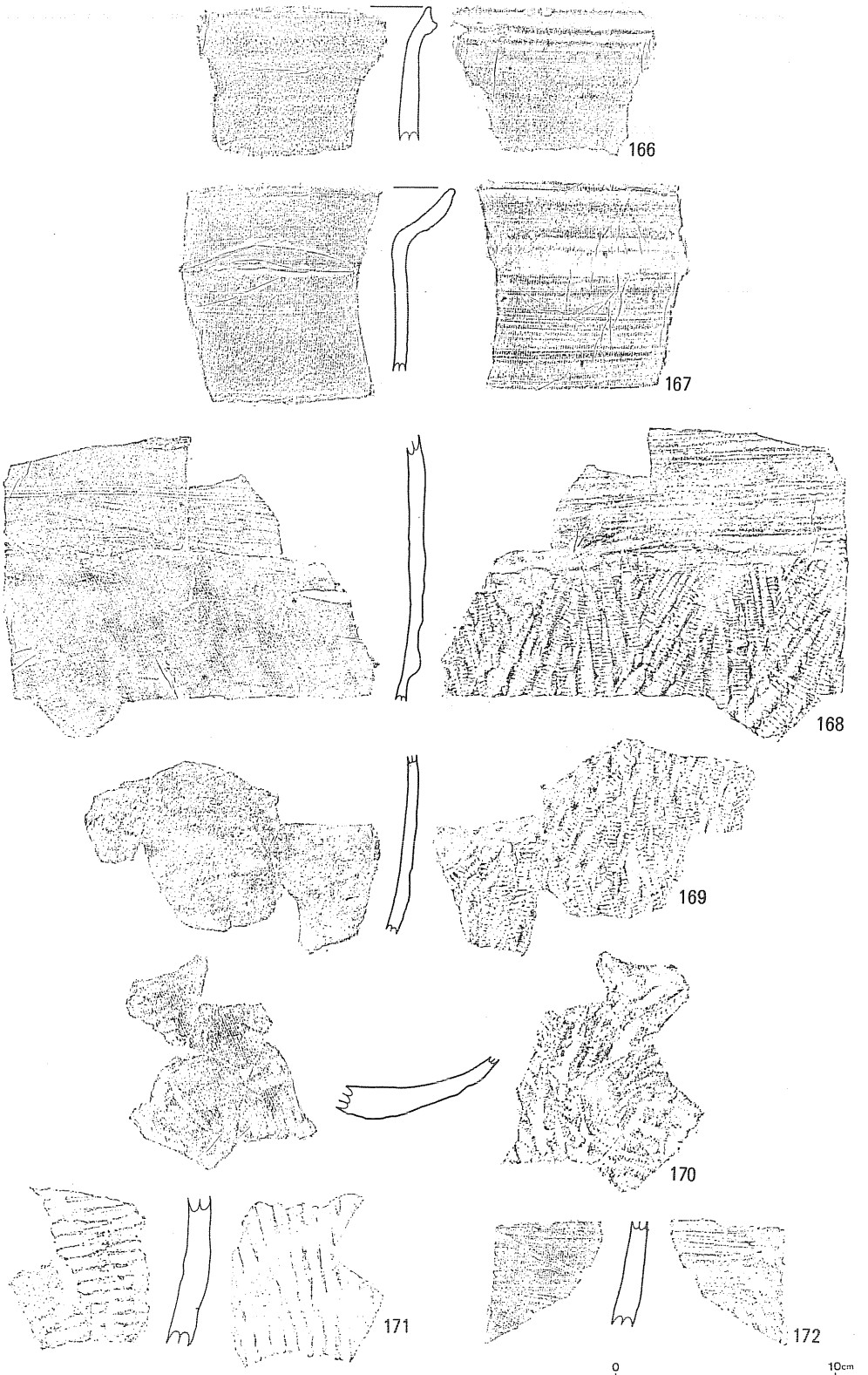
第24図　SX 11　出土土器　(2)



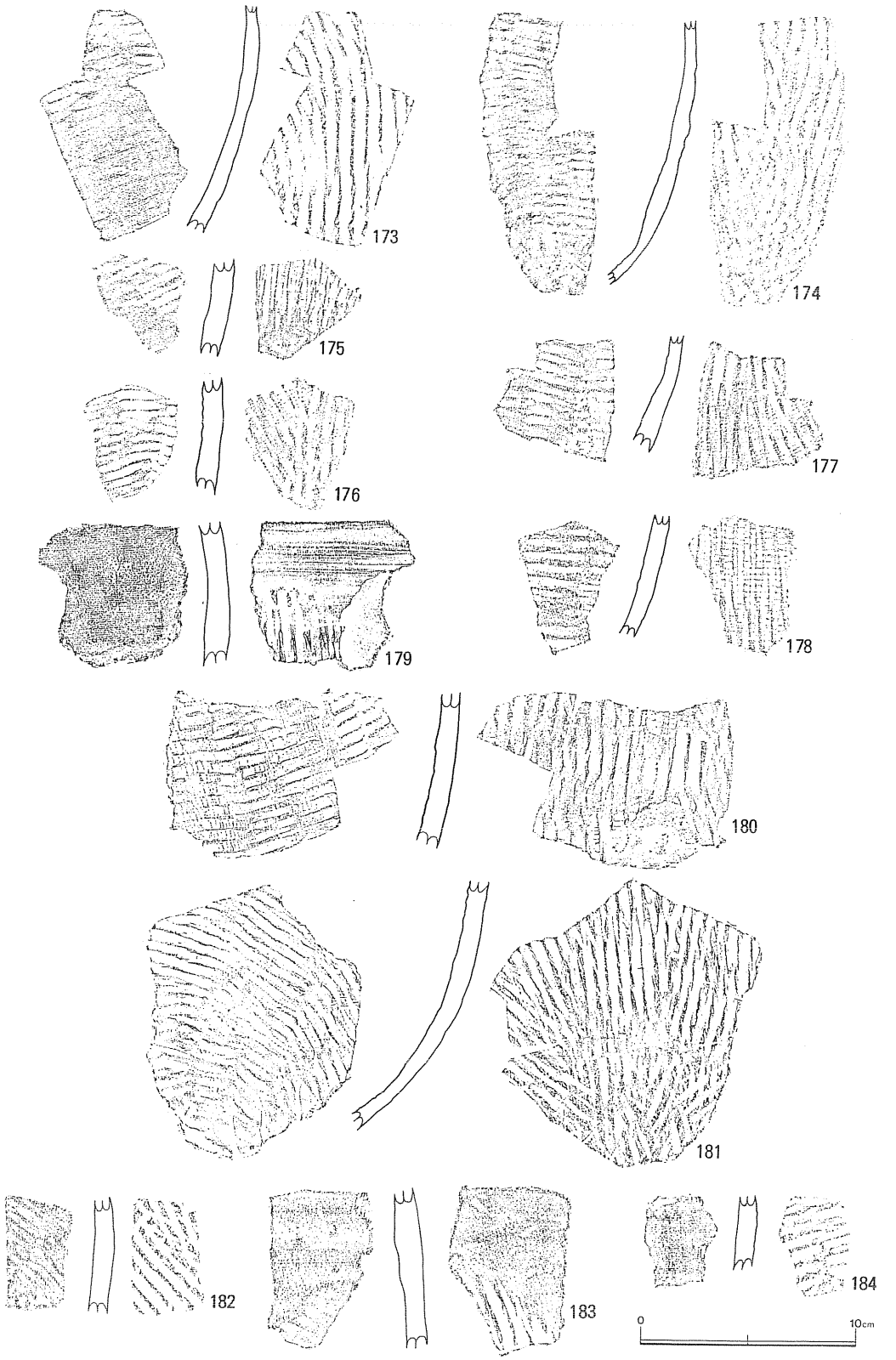
第25図　SX 11　出土土器　(3)



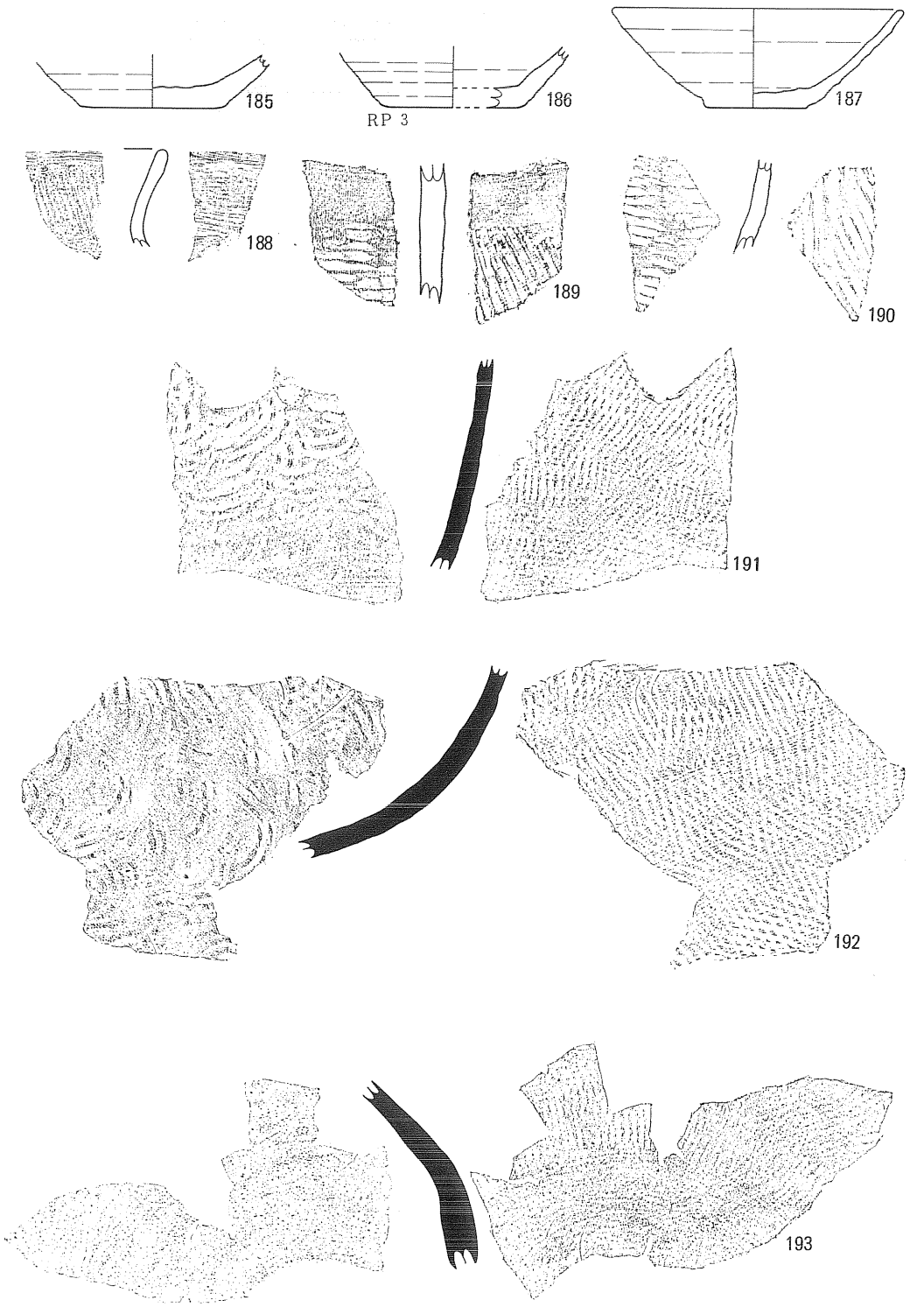
第26図　SX 11　出土遺物 (4)



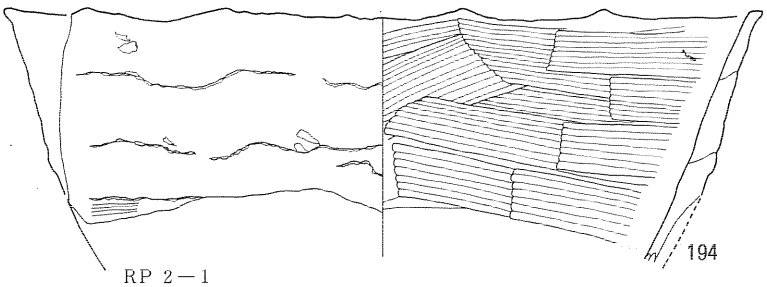
第27図　ＳＸ 11　出土土器 (5)

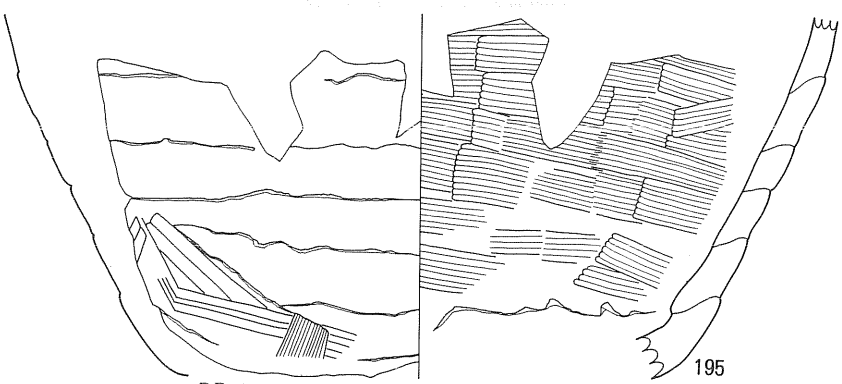


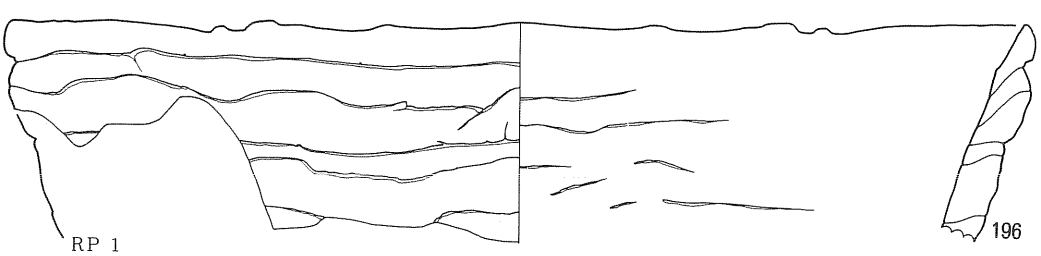
第28図　ＳＸ11　出土土器　(6)

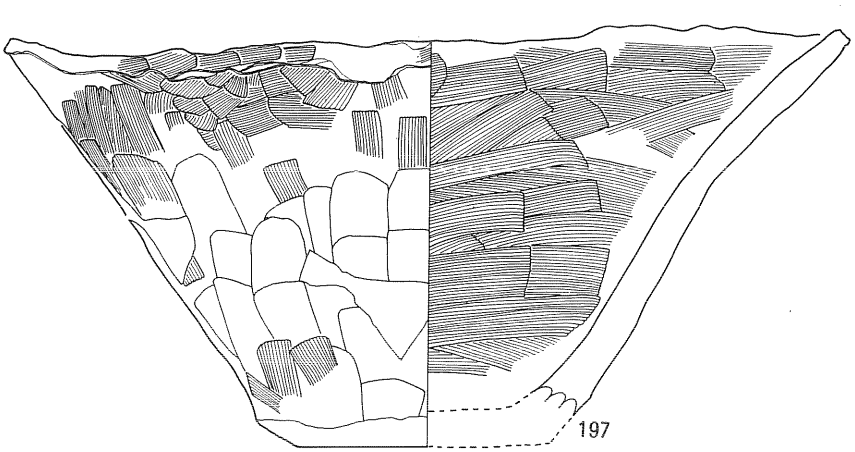


第29図　ＳＮ06　焼土遺構出土土器（1）



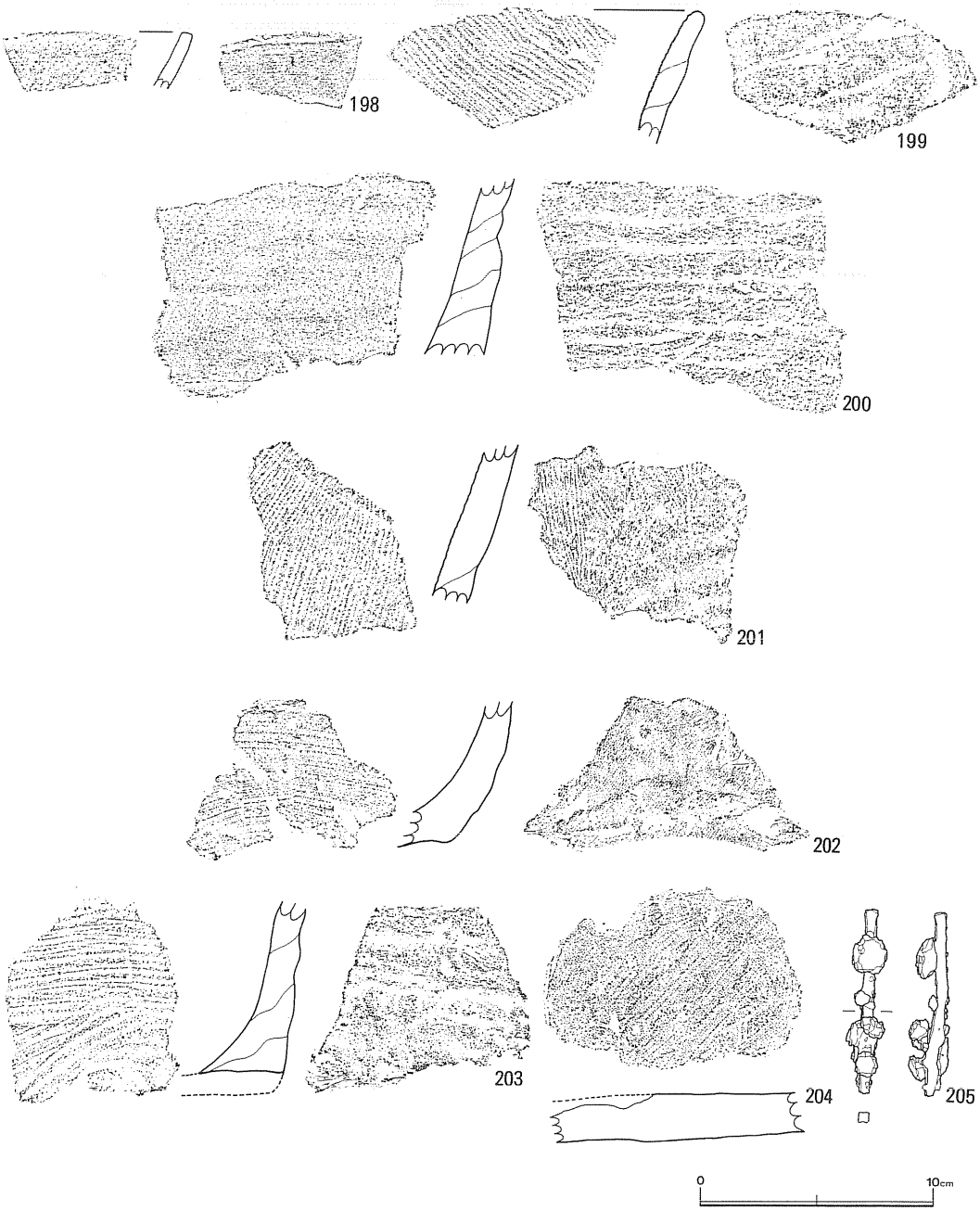




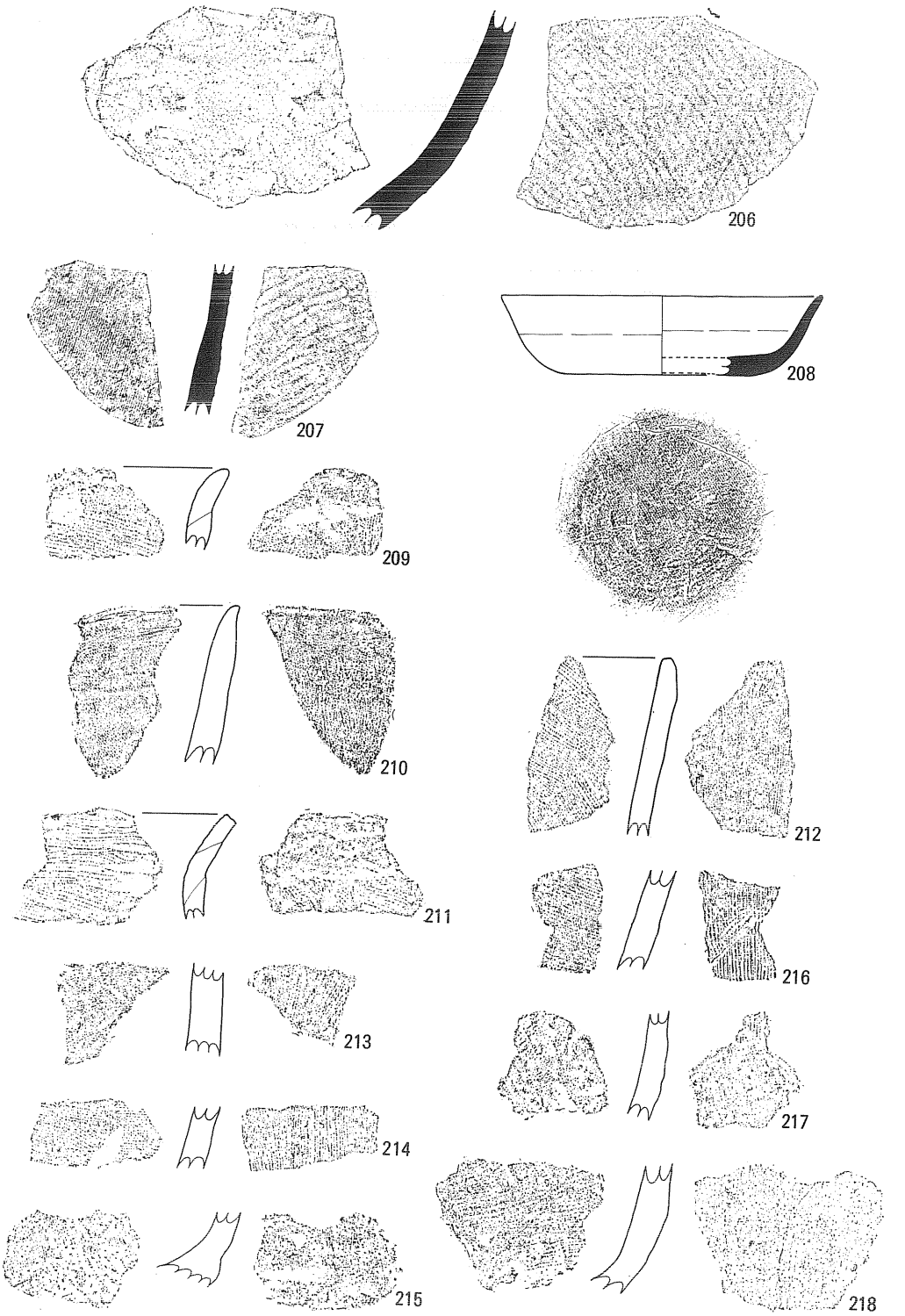


第30図　SN 06　焼土遺構出土土器　(2)

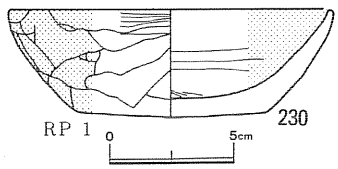
0　10cm



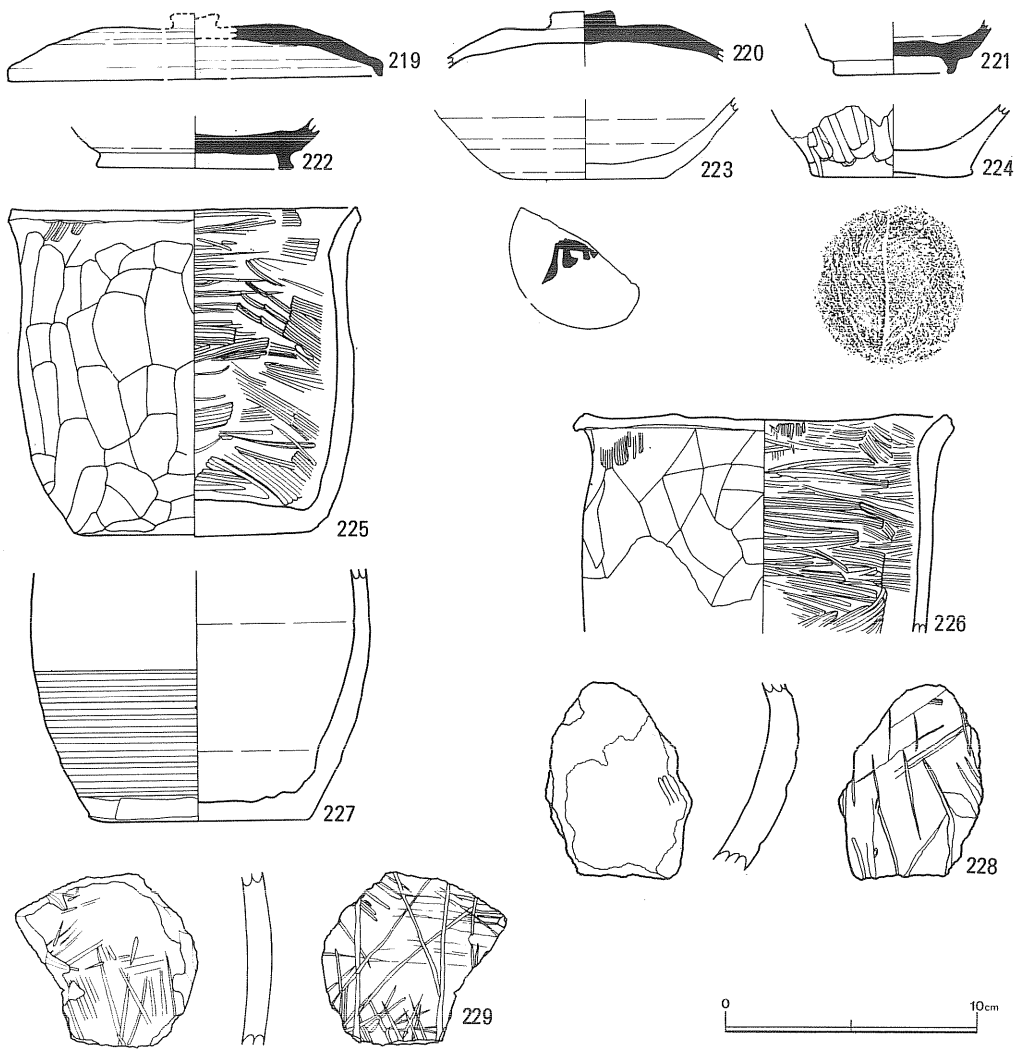
第31図　ＳＮ06　焼土遺構出土遺物　(3)



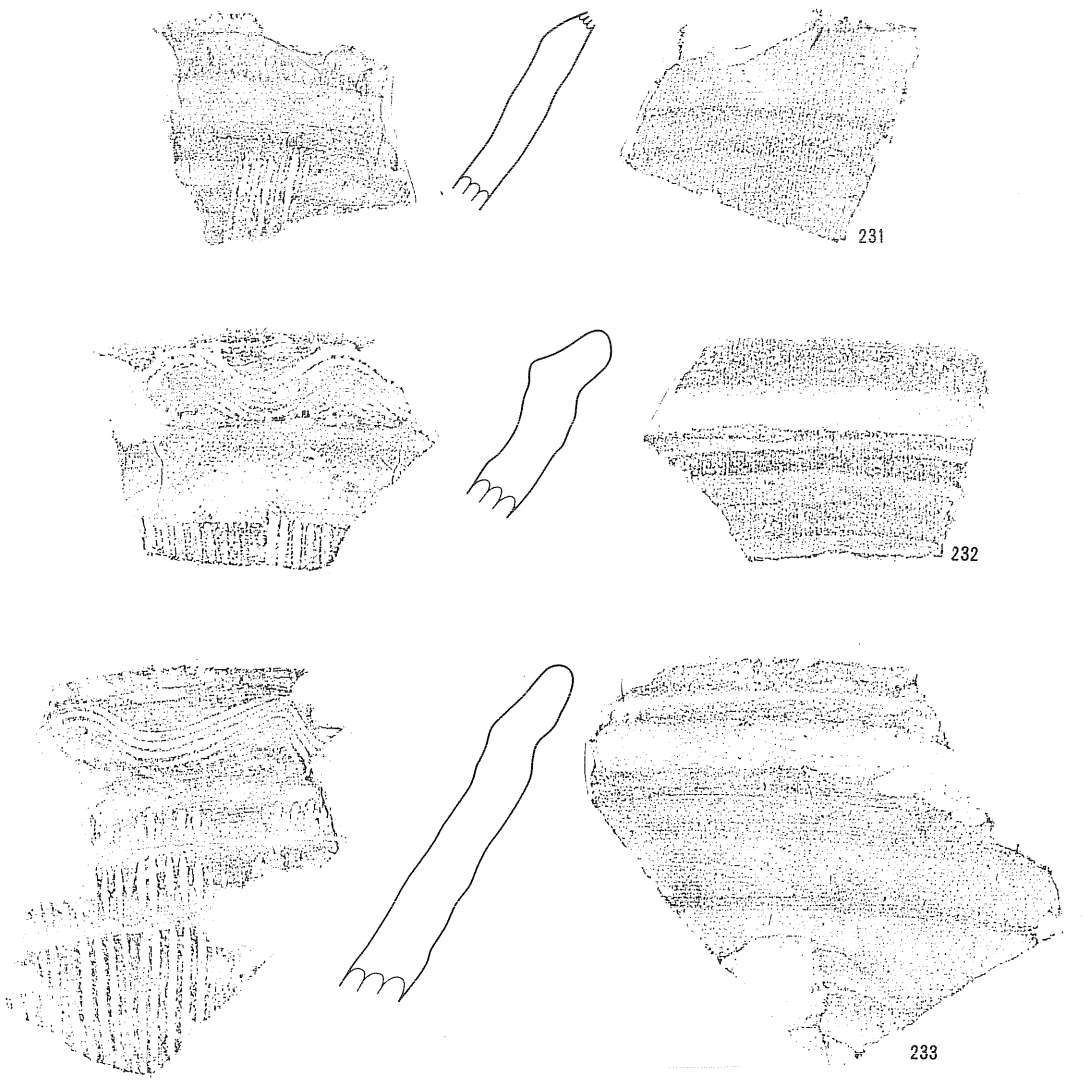
第32図　ＳＮ 18　焼土遺構出土土器



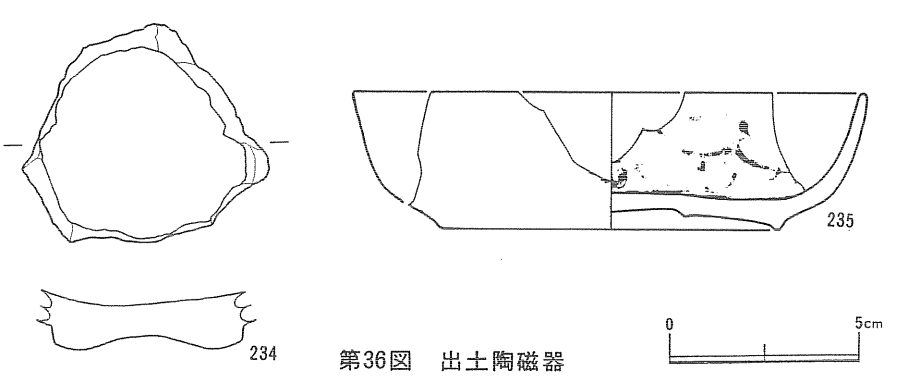
第33図　ＳＮ20　出土土器



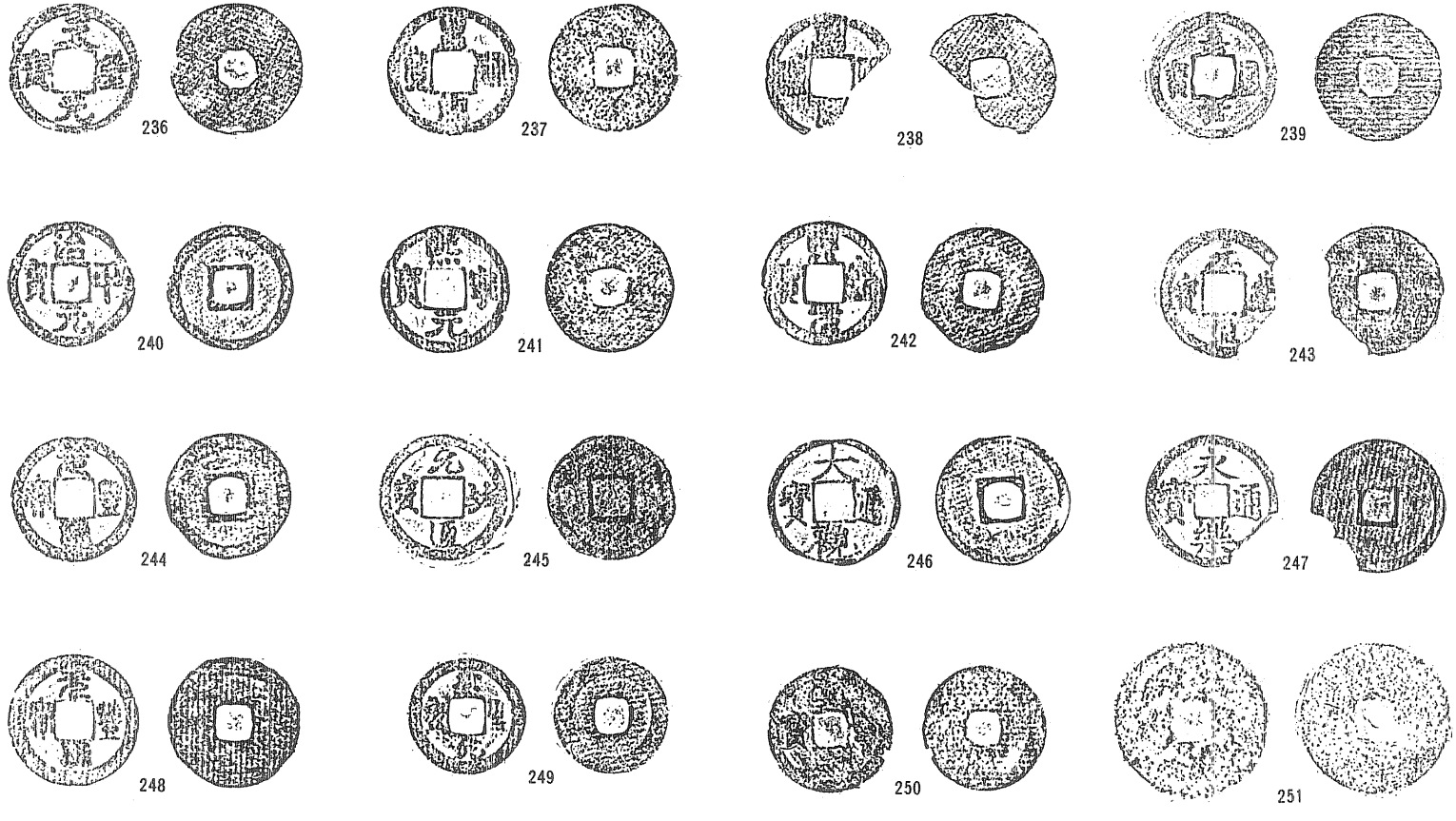
第34図　遺構外出土土器

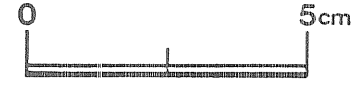


第35図　出土中世陶器



第36図　出土陶磁器


236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251


0
5cm

第37図　古銭

第1表　SI12出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
16－11	SI12 RP4	須恵器杯	13.1	—	4.3	—	24.0°	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰オリーブ 外 灰オリーブ	回転ヘラ切り	29
16－12	SI12 RP3	須恵器杯	(14.7)	(10.0)	3.3	(0.68)	24.0°	(22)	1㎜位の砂粒混入	内 灰オリーブ 外 灰黄	回転ヘラ切り	30
16－13	SI12 RP1	須恵器高台付杯	(11.7)	(7.3)	4.9	(0.63)	13.0°	(43)	1㎜位の砂粒混入	内 灰黄 外 灰	回転ヘラ切り	101
16－14	SI12 RP2	土師器甕	(21.0)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 明黄橙 外 にぶい黄橙	外面 タタキ目	83
16－15	SI12 カマド内	土製支脚	—	(12.3)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい赤橙 外 灰褐		84
16－16	SI12 カマド内	土製支脚	—	(13.3)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 明赤褐 外 にぶい褐		85

第2表　SD05出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
17－24	SD05 底面	須恵器杯	11.7	6.8	3.4	0.58	23.0°	29	1㎜位の砂粒混入	内 灰黄 外 浅黄	回転ヘラ切り	16
17－25	SD05 底面	須恵器杯	11.6	7.8	3.5	0.68	19.0°	30	1㎜位の砂粒混入	内 灰白 外 灰白	回転ヘラ切り	15
17－26	SD05 RP1	須恵器杯	12.9	7.7	3.5	0.60	25.0°	28	1㎜位の砂粒混入	内 オリーブ灰 外 オリーブ灰	回転ヘラ切り	17
17－27	SD05 底面	須恵器杯	12.2	6.0	3.7	0.49	21.0°	30	1㎜位の砂粒混入	内 明青灰 外 褐灰	回転ヘラ切り	18
17－28	SD05 RP2	須恵器杯	(12.1)	(7.3)	4.0	0.60	28.0°	(33)	1㎜位の砂粒混入	内 灰 外 灰	回転ヘラ切り 体部下端ケズリ	19
17－29	SD05 底面	須恵器杯	12.4	7.6	4.2	0.61	20.0°	34	1㎜位の砂粒混入	内 浅黄 外 灰黄	回転ヘラ切り 体部下端ケズリ	20
17－30	SD05 底面	須恵器杯	(12.0)	7.3	3.1	(0.61)	23.0°	(26)	1㎜位の砂粒混入	内 灰黄 外 淡黄	回転ヘラ切り	22
17－31	SD05 底面	須恵器杯	(13.0)	(7.2)	3.5	(0.55)	29.0°	(27)	1㎜位の砂粒混入	内 灰白 外 淡黄	回転ヘラ切り	25
17－32	SD05 底面	須恵器杯	(12.9)	7.2	3.9	(0.56)	24.0°	(30)	1㎜位の砂粒混入	内 灰 外 灰	回転ヘラ切り	26
17－33	SD05 底面	須恵器杯	14.4	7.9	3.9	0.55	23.0°	27	1㎜位の砂粒混入	内 黄灰 外 灰	回転ヘラ切り	21
17－34	SD05 底面	須恵器杯	—	(8.7)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 浅黄 外 浅黄	回転ヘラ切り	28
17－35	SD05 RP3	須恵器杯	(12.6)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰 外 灰		27
17－36	SD05 底面	須恵器杯	(15.3)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰白 外 淡黄		24
18－39	SD05 底面	須恵器長頸壺	(12.0)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰オリーブ 外 灰オリーブ 黒	内外面 自然釉	89
18－40	SD05 RP4－1	須恵器甕	(22.4)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰 外 灰		88
19－45	SD05 RP5	土師器杯	(12.4)	5.6	4.8	(0.45)	33.0°	(39)	1㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 浅黄橙	回転糸切り	31
19－46	SD05 底面	土師器杯	—	(5.4)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 浅黄橙	回転糸切り	131
19－47	SD05 底面	土師器杯	—	5.8	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黒 外 にぶい黄橙	内面 黒色処理 回転糸切り	35
19－48	SD05 底面	土師器杯	—	5.3	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黒 外 褐灰	回転糸切り 黒色処理	34
19－49	SD05 覆土中	土師器杯	—	6.4	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 橙	回転糸切り	130
19－50	SD05 覆土中	手捏土器	—	(2.4)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰黄褐 外 褐		91
19－52	SD05 RP4－2	製塩土器	—	(12.6)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	底部厚 1.35～1.70㎝	94
19－53	SD05 底面	土製支脚	—	(10.2)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 灰白		92
19－54	SD05 RP6	製塩土器	—	(25.0)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 浅黄橙	器厚 1.40～1.90㎝	95
20－65	SD05 RP7	製塩土器		(17.9)					1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	器厚 1.60㎝	93
20－73	SD05 底面								1㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 灰白	底部のみ	90

第3表　SQ04出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
21－82	SQ04 RP2	土製支脚	15.5	13.9	13.3	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 赤橙 外 にぶい黄橙	粘土紐巻き上げ	36
21－83	SQ04 RP1	土師器甕	—	(7.2)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰褐 外 にぶい褐	静止糸切り	38

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
21－84	SQ04 覆土中	土師器甕	—	(9.6)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 浅黄橙	底部木葉痕	96
21－85	SQ04 RP3	土師器甕	—	(8.5)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 暗灰黄	底部平滑	37
21－94	SQ04 覆土中	製塩土器	—	10.0	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 灰黄褐 外 灰白	板目状圧痕 底部厚 2.10㎝	97

第4表　SX01出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
22－97	SX01 RP1	須恵器杯	(13.7)	9.1	3.7	(0.66)	21.0°	(27)	1～3㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄 外 にぶい黄	回転ヘラ切り	87
22－105	SX01 RP2	製塩土器	—	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	器厚 1.40～1.70㎝	86

第5表　SX11出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
23－106	SX11 RP4－1	須恵器杯	—	(5.4)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 灰オリーブ 外 灰オリーブ	回転糸切り	65
23－107	SX11 フクド上面	須恵器杯	—	(7.9)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	回転ヘラ切り	68
23－108	SX11 上面	須恵器杯	—	(4.8)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰オリーブ 外 灰	回転糸切り	64
23－111	SX11 RP3－1	須恵器壷	—	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 灰黄褐 外 灰褐	全体に自然釉	66
23－112	SX11 RP4－2	須恵器壷	(15.3)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黄灰 外 黄灰		67
24－114	SX11	土師器杯	(13.2)	5.9	4.7	(0.44)	38.0°	(36)	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 浅黄橙	回転糸切り	8
24－115	SX11 RP10－1	土師器杯	(13.1)	(5.8)	4.8	(0.45)	32.0°	(37)	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	回転糸切り	43
24－116	SX11 RP1	土師器杯	(12.4)	4.6	4.9	(0.37)	33.0°	(40)	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	回転糸切り	5
24－117	SX11 RP3－2	土師器杯	(12.8)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙		48
24－118	SX11 RP8－1	土師器杯	13.0	(4.6)	4.7	(0.35)	35.0°	36	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	回転糸切り	42
24－119	SX11 RP2	土師器杯	(12.0)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 橙 外 浅黄橙		51
24－120	SX11 覆土上	土師器杯	(11.8)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 浅黄橙		52
24－121	SX11 覆土中	土師器杯	—	(6.1)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 明褐	回転糸切り	46
24－122	SX11 覆土中	土師器杯	(13.3)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙		50
24－123	SX11 RP4－3	土師器杯	(14.2)	5.2	4.3	(0.37)	38.0°	(30)	1㎜位の砂粒混入	内 明褐 外 橙	回転糸切り	9
24－124	SX11	土師器杯	(13.2)	(5.2)	4.0	(0.39)	40.0°	(30)	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	回転糸切り	10
24－125	SX11 覆土中	土師器杯	(13.9)	(5.8)	4.8	(0.42)	33.0°	(35)	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 黄橙	回転糸切り	39
24－126	SX11 上面	土師器杯	(14.8)	(6.1)	5.6	(0.41)	30.0°	37	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙		41
24－127	SX11 RP10－2	土師器杯	(14.4)	6.4	5.4	(0.44)	33.0°	(38)	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 にぶい赤褐	回転糸切り	6
24－128	SX11 RP10－3	土師器杯	(14.8)	5.9	6.3	(0.40)	36.0°	(40)	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	回転糸切り	7
24－129	SX11	土師器杯	(15.3)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 黄橙		49
24－130	SX11 RP3－3	土師器杯	—	5.6	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 灰黄褐 外 にぶい黄橙	回転糸切り	54
24－131	SX11 RP4－4	土師器杯	—	4.9	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 橙 外 にぶい橙	回転糸切り	44
24－132	SX11 RP4－5	土師器杯	—	4.7	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	回転糸切り	45
24－133	SX11 覆土上	土師器杯	—	6.0	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黒 外 にぶい褐	回転糸切り 内面底部にミガキ	1
24－134	SX11 覆土上	土師器高台付椀	—	(6.1)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 黒 外 浅黄橙	内面にミガキ	69
24－135	SX11 覆土	土師器高台付椀	(17.6)	7.7	7.1	(0.44)	34.0°	(41)	1㎜位の砂粒混入	内 黒 外 にぶい黄橙	回転糸切り 内面 ヘラミガキ	3
24－136	SX11 RP6	土師器甕	—	(6.2)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 浅黄橙	回転糸切り	53
24－137	SX11 RP4－6	土師器甕	—	8.6	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 にぶい黄橙	回転糸切り	47
24－138	SX11 RP5－1	土師器甕	—	7.5	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい褐 外 橙	静止糸切り	4

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
24－139	SX11 RP10－4	土師器甕	—	6.6	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 灰白	回転糸切り	40
24－140	SX11 RP3－4	土師器甕	(18.8)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	ロクロ	59
24－141	SX11 RP10－5	土師器高台付椀	—	(7.8)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黒 外 にぶい橙	回転糸切り 内面 黒色処理	2
24－142	SX11 RP9－1	土師器高台付椀	—	(8.1)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 明赤褐 外 にぶい橙	回転糸切り 内面 ミガキ	55
24－143	SX11 覆土	土師器杯	—	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	墨書土器 (墨書銘不明)	111
25－144	SX11 RP5－2	土師器甕	—	(7.0)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい赤褐 外 にぶい赤褐	内面 ハケ目 ナデ 外面 ヘラケズリ 器厚0.90cm	56
25－145	SX11 ベルト	土師器甕	(14.3)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい褐 外 にぶい褐	内面 ハケ目 外面 ハケ目→ヘラケズリ	60
25－146	SX11 RP3－5	製塩土器	(18.5)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい赤褐 外 にぶい橙	器厚 0.90～1.20cm	61
25－147	SX11 RP5－3	土師器甕	(23.3)	(10.5)	28.1	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 暗赤褐 外 赤褐	内面ハケ目 外面ハケ目,ケズリ[砂底] 器厚0.90～1.10cm	62
25－148	SX11 RP8－2	製塩土器	—	(11.0)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	器厚 1.20～1.60cm	71
25－149	SX11 RP5－4	製塩土器	—	(10.6)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 明赤褐 外 にぶい赤褐	内面 ハケ目 外面 ケズリ	58
25－150	SX11 RP5－5	土師器甕	—	(12.2)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰褐 外 にぶい赤褐	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	57
25－151	SX11 RP7－2	製塩土器	—	(15.4)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	器厚 1.30cm	74
25－152	SX11 覆土上	土製支脚	—	(9.8)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙		70
25－153	SX11 RP9－2	土製支脚	—	(8.2)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙		73
25－154	SX11 RP5－6	土製支脚	—	(12.4)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 灰オリーブ		72
25－155	SX11 上面	製塩土器	—	(20.4)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 淡黄 外 淡黄	器厚 1.30cm	63
26－156	SX11 RP9－3	土製支脚	上面 (7.3)	底面 (8.2)	高さ 13.1	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	橙	指ナデ	11
26－157	SX11 RP10－6	土製支脚	上面 (9.3)	底面 (8.3)	高さ 12.7	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	胴部 上方 黄褐 下方 橙	〃	12
26－158	SX11 RP10－7	土製支脚	上面 —	底面 (7.3)	高さ 14.2	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	胴部にぶい黄橙 底部明赤褐	〃	13
26－159	SX11 RP7－3	土製支脚	上面 9.6	底面 9.3	高さ 12.9	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	にぶい橙	〃	14

第6表　SN06出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
29－185	SN06	土師器杯	—	(6.6)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 橙	回転糸切り	80
29－186	SN06 RP3	土師器杯	—	(6.6)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	回転糸切り	82
29－187	SN06 覆土中	土師器杯	12.9	4.6	4.5	0.36	39.0°	35	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 黄褐	回転糸切り	79
30－194	SN06 RP2－1	製塩土器	(29.8)	—	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	器厚 0.80～1.10cm	77
30－195	SN06 RP4	製塩土器	—	(18.6)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	器厚 1.05～1.20cm	76
30－196	SN06 RP1	製塩土器	(40.0)	—	—	—	—	—	2㎜位の砂粒混入	内 橙 外 橙	器厚 1.40～1.60cm	78
30－197	SN06 RP2－2	製塩土器 播鉢	32.6	(13.2)	(16.6)	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄褐 外 にぶい橙	器厚 1.25～1.70cm	81

第7表　SN18出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
32－208	SN18 確認面	須恵器杯	14.1	8.0	4.2	0.60	23.0°	25	1㎜位の砂粒混入	内 灰黄 外 灰黄	回転ヘラ切り	23

第8表　SN20出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
33－230	SN20 RP1	土師器杯	12.8	7.4	4.3	0.58	26.0°	34	1㎜位の砂粒混入		内外面 黒色処理	75

第９表　遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径指数	外傾度	高径指数	胎土	色調	備考	登録番号
15－9	KB41Ⅱ	縄文土器深鉢	—	12.2	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	内面 煤状炭火物付着	109
15－10	KB41Ⅱ	縄文土器深鉢	—	14.4	—	—	—	—	2～3㎜位の砂粒混入	内 にぶい褐 外 にぶい褐	内面 煤状炭火物付着	107
34－219	KI40Ⅱ	須恵器蓋	14.6	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰 外 灰		99
34－220	LD38Ⅱ	須恵器蓋	—	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黄灰 外 灰黄		100
34－221	KG38Ⅱ	須恵器高台付杯	—	(4.8)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 黄灰 外 黄褐	回転ヘラ切り 内面に自然釉	104
34－222	KD41Ⅰ	須恵器高台付杯	—	(7.7)	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 灰オリーブ 外 灰オリーブ	回転ヘラ切り	103
34－223	LG39Ⅱ	土師器杯	—	6.4	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい橙	回転糸切り 墨書銘不明	112
34－224	LF38Ⅱ	土師器甕	—	6.4	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 浅黄橙 外 灰黄褐	底部木葉痕	98
34－225	KI40Ⅱ	土師器甕	(13.5)	9.5	13.0	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい黄橙 外 黄橙	底部平滑	106
34－226	KI40Ⅱ	土師器甕	(14.2)	—	—	—	—	—	1㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい黄橙		105
34－227	LF35Ⅱ上	土師器甕	—	(8.7)	—	—	—	—	1～2㎜位の砂粒混入	内 にぶい橙 外 にぶい黄橙	底部平滑	107

第10表　出土銅銭一覧表

拓影番号	出土地区	層位	銭名	初鋳年	登録番号
236	SD05（LD－43）	覆土上面	天聖元宝	北宋　天聖元年　1023	3
237	SD05（LD－43）	覆土上面	皇宋通宝	北宋　宝元２年　1039	12
238	SD05（LD－43）	覆土上面	皇宋通宝	北宋　宝元２年　1039	9
239	SD05（LD－43）	覆土上面	嘉祐通宝	北宋　嘉祐２年　1057	1
240	SD05（LD－43）	覆土上面	治平元宝	北宋　治平元年　1064	4
241	SD05（LD－43）	覆土上面	熙寧元宝	北宋　熙寧元年　1068	7
242	SD05（LD－43）	覆土上面	熙寧元宝	北宋　熙寧元年　1068	8
243	SD05（LD－43）	覆土上面	元豊通宝	北宋　元豊元年　1078	6
244	SD05（LD－43）	覆土上面	元豊通宝	北宋　元豊元年　1078	10
245	SD05（LD－43）	覆土上面	元拓通宝	北宋　元祐８年　1093	2
246	SD05（LD－43）	覆土上面	大観通宝	北宋　大観元年　1107	11
247	SD05（LD－43）	覆土上面	永楽通宝	明　永楽６年　1408	5
248	KA43グリッド	Ⅱ層	元豊通宝	北宋　元豊元年　1078	13
249	KC46グリッド	Ⅰ層	紹聖元宝	北宋　紹聖元年　1094	16
250	KJ38グリッド	Ⅰ層	寛永通宝	江戸　明正６年　1636	15
251	KG39グリッド	Ⅰ層	判読不可或いは無銘	２文銭	14

第5章　まとめ

本年度の第2次調査は、遺跡のほぼ中央部から北東部を調査し、古代の竪穴住居跡1軒、溝跡3条、炉跡1基、土壙1基、焼土遺構7基、その他の遺構3などを検出したが、遺構数の割りに出土遺物の量が多く、その数はコンテナで約20箱にのぼった。そのため、遺構内出土の遺物を中心にできるだけ多くの遺物を図示した。それら出土土器から遺構の年代を推定し、あわせて遺構についても若干の検討をしてまとめにかえたい。

検出した遺構は出土遺物によって大きく2遺構期に分けることができる。

第Ⅰ期ＳＩ12、ＳＤ05、ＳＸ01、ＳＸ18、ＳＮ20の遺構が該当する。ＳＤ05からは須恵器杯・甕・壺、土師器杯・製塩土器などが出土しているが、その中の須恵器杯は、丸底・丸底風か平底でいずれも底部回転ヘラ切りで、多くは無調整である。その中に平底で体部下端に回転ヘラケズリを施す土器が2点ある。ＳＩ12、ＳＸ01、ＳＮ18からも同様な無調整・底部回転ヘラ切りの須恵器杯が出土し、ＳＩ12からは砲弾形を呈すると考えられるタタキ目のある土師器甕が共伴している。(註1) これらの須恵器杯の底径指数は0.49～0.68である。秋田城跡では第25次調査で、井戸跡から「天平6（734）年月」「勝宝5（754）年」銘の木簡とともに土師器杯・須恵器杯が出土した。(註2) 須恵器杯は底部回転ヘラ切り・回転ヘラケズリが1点、底部ヘラ切り・無調整が2点で、これらの土器は、木簡の紀年銘からその年代が8世紀第3四半期頃に比定されている。(註3) また、ＳＮ20からは内外面黒色処理を施した非ロクロの土師器杯が出土している。以上のことなどから本遺構期は8世紀後半頃と思われる。

第Ⅱ期　ＳＸ11、ＳＮ06の遺構が該当する。ＳＸ11からは須恵器杯・甕・壺、土師器杯・椀・甕・製塩土器が出土しており、土師器の量が須恵器を圧倒的に上回る。その中で土師器杯は、いずれも底部回転糸切り・無調整で、口径の割りに底径が小さく、その底径指数は0.35～0.45の間である。色調は橙色か浅黄橙色を呈する。ＳＮ06からも同じ特徴を持つ土器が出土している。払田柵跡ではＳＫ60から嘉祥2（846）年銘木簡とともに、底部回転糸切りでヘラケズリのある土師器杯が出土しているし、(註4) 土師器杯および須恵器杯の底部の切り離しが回転ヘラ切りから回転糸切りに全面的に移行するのは9世紀後半以降と考えられているので、両遺構は9世紀後半から10世紀前半頃までの年代を与えたい。

遺構はこのほかにＳＮ17、ＳＫ02などが検出されている。しかし、出土遺物、遺構間の重複がなく時期決定の決め手に欠けるが、前記のいずれかに入るものであろう。

次に製塩土器と製塩遺構についてふれてみたい。製塩土器と呼んだ土師器は、出土遺物全体

の¼ほどを占め、第Ⅰ期の遺構すべてと第Ⅱ期のＳＸ11から多量に出土しているが、細片が多く、図示できたものは数少ない。その特徴をみてみると、①器形は鉢形か深鉢形で、深鉢形のものはかなり大きく、口径が40㎝をこえるものもあること、②土器の外面には粘土紐の巻上げ痕、内面には調整として、刷毛目を残していること、③胎土には粗砂粒が混入し、同じ非ロクロの土師器甕に比較して器厚があり、外面には二次火熱を受け赤変している部分があり、剥離痕を有すること、④底面には板目状の圧痕を有するものも多くあること、⑤口縁部から口唇部にかけてだんだん薄くなるものや、口縁部と口唇部が同じ器厚で口唇部が平らに「冂」状になるものが多い、などの点をあげることができる。

ＳＸ11で出土した鼓状の土製支脚は、胎土が荒く、色調は橙色を呈し、外面は指による成形痕が残る。本県では、八森町で１点採集されているが、発掘調査で出土したのは初めてである。福井県では、若狭湾沿岸に出土例(註5)があり、東北地方北部においては、青森県の日本海沿岸から陸奥湾沿岸にかけて出土(註6)しているが、形態は当遺跡の出土品と同じ形態のものと、土管状を呈するものがある。

県内の発掘調査による製塩遺構は、今のところ本遺跡の第１次調査で検出した焼土遺構１基のみであるが、東北においては太平洋側の宮城県・磯崎西ノ浜遺跡で、大型扁平な河原石を２つ並べた2.0ｍ×1.50ｍ内外の奈良時代に属する「楕円形竈(かまど)(註7)」が発掘調査で検出されている。青森県では、日本海側から陸奥湾沿岸にかけて製塩遺跡が多く所在するが、古代の製塩遺構の検出例をみると「自然礫と砂で囲った凹地」が「製塩炉(註8)」で、その中に土製支脚を埋めている場合もある。

今回の調査で検出した遺構の中で、ＳＱ04は板状の石を「コ」字形に組んだ炉で、中に土製支脚を埋設しており、青森県の場合と比較して類似点がみられる。ＳＮ06とした焼土遺構は、製塩土器が周囲から多く出土している。遺構内外からは、自然礫や土製支脚が出土せず、他県の製塩遺構に多く見られる土器片が敷きつめられた様な状況ではなかったが、遺構のすぐ近くにまとまって数多く出土した事から、製塩遺構の可能性が強いと考えられる。

註１　秋田県内の発掘調査によって出土した砲弾形を呈するタタキ目のある土師器甕の例は、湯沢市広沢山、雄物川町蝦夷塚古墳群、仙北町・千畑町払田柵跡、秋田市秋田城跡、後城、男鹿市三十刈、Ⅱ、能代市中台の各遺跡があげられる。
註２　秋田県教育委員会　『秋田城跡―昭和53年度発掘調査概報』　1978年
註３　小松正夫　「秋田城跡の発掘調査」　『日本歴史』　６月号（第445号）1985（昭和60）年
註４　秋田県教育委員会　『払田柵跡―昭和50年度発掘調査概要』　1975年
註５　戸澗幹夫　「能登式製塩土器―型式分類とその変遷」『北陸の考古学』1983（昭和58）年
註６ａ北林八洲晴　「古代（奈良・平安時代）」　『青森県の考古学』　青森大学出版局　1983年
　　ｂ―町田　工　「尻高（５）遺跡・郷沢遺跡の製塩土器」　『青森県考古学』第２号　1985年
註７　加藤　孝　「古代東北に於ける製塩遺構の研究　その３―特に東北古代史の考古学的研究―」『生活文化』〝６の３　1964（昭和39）年
註８　註６ａと同じ

別編　カウヤ遺跡出土土器の胎土及び遺跡内土壌分析

分　析　証　明　書

分析証明No. 60 － 031

依　　頼　　者　　秋田県埋蔵文化財センター 殿

依頼品名及点数　　土壌　3点（灰白色物質1点を含む）及び土器片　2点

分　析　成　績

1. 分析結果：別紙のとおり（表1）。
2. 分析方法：別紙のとおり。

上記成績は依頼者から提出された試料について行なった分析の結果であることを証明いたします。

昭和 61 年 1 月 31 日

計量証明事業　　群馬県　環　第 17 号

パリノ・サーヴェイ株式会社
東京都中央区日本橋室町2－1　電話 03－241－4566
土壌研究センター　環境計量士　駿　河　英　一

分析証明書 No. 60 － 031

1. 分析結果

表 1

分析項目 / 試料No.	カルシウム 全量T－Ca mg/g ※	マグネシウム 全量T－Mg mg/g ※	リン全量 T－P mg/g ※	硫酸根 SO_4 mg/g ※
1	0.58	2.78	0.36	0.48
2	0.65	2.65	0.61	0.66
3	0.63	3.07	0.23	0.64
4	0.57	2.78	0.53	2.06
5	1.75	5.43	0.94	2.05

注 ※・・・乾物あたり

2. 分析方法：下記の分析書による。
① 日本分析化学会編：分析化学便覧，1981
② 京都大学農学部農芸化学教室編：農芸化学実験書第1巻，1957
③ 農水省農林水産技術会議事務局監修：土壌養分分析法，養賢堂，1981
④ 山添文雄　ほか共著：改訂　詳解肥料分析法，養賢堂，1973

3　所　見

（1）No. 3試料・遺跡内基本層位第Ⅱ層土壌　ＳＱ04炉付近（対照土壌）

Caの含量は、一般農耕地の土壌のばあい約2.0㎎以上であるのに比べて、著しく低く、Ｐについてはほぼ一般的な含量を示している。一方、Mgの含量は顕著に高い（一般農耕地では0.15～0.50㎎である）ことが認められ、海岸近傍に位置している遺跡であるので本土壌が海水の影響をうけていることを示唆している。

（2）No. 2試料・ＳＱ04炉内第Ⅰ層土壌

CaおよびMgの含量についてはNo. 3土壌に近似しているが、Ｐ含量の高いことから人為的影響をうけた土壌の可能性が強い。

（3）No. 1試料・ＳＱ04炉脇に検出された灰白色物質

採取場所が近接しているNo. 2土壌と大差のない成分含量であることが認められる。

（4）No. 4試料・ＳＱ04炉ＲＰ6出土土器片

Ca、MgおよびＰの3成分についてはNo. 2土壌と含量にほとんど差異はみられない。しかし、SO_4含量において著しく高いことが特徴的であり、製塩の影響をうけていることが推定される。

（5）No. 5試料・ＳＮ06ＲＰ2覆土より出土した土器片

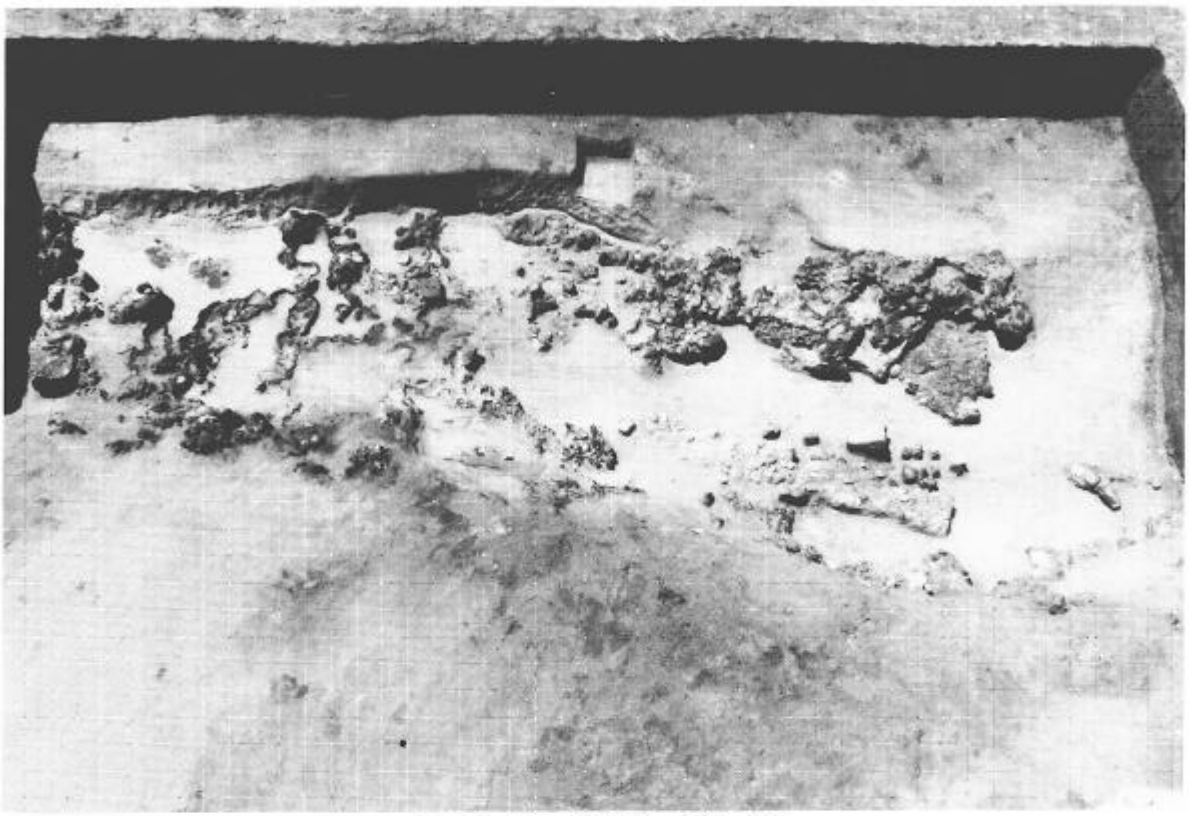
CaおよびMgの含量が他の4試料に比べて著しく高く、またＰの含量も高く、さらにSO_4についてもNo. 4と同一の含量であることが認められる。これらの成分、とくにMgとSO_4の含量が高いことから、本土器は製塩土器であることがうら書きされていると考えられる。

製塩土器と考えられている試料は、No. 4とNo. 5である。分析結果からは、No. 4よりNo. 5の方がより製塩土器の特徴を表わしている。No. 4はＳＱ04炉の試料であり、No. 5はＳＮ06焼土遺構の試料なので、遺構の性格からＳＮ06よりＳＱ04の方が高い値を示すことも考えられたが、結果は逆であった。しかし、土器片どうしの結果から、遺構の比較は必ずしも正しい検討とはいえない。

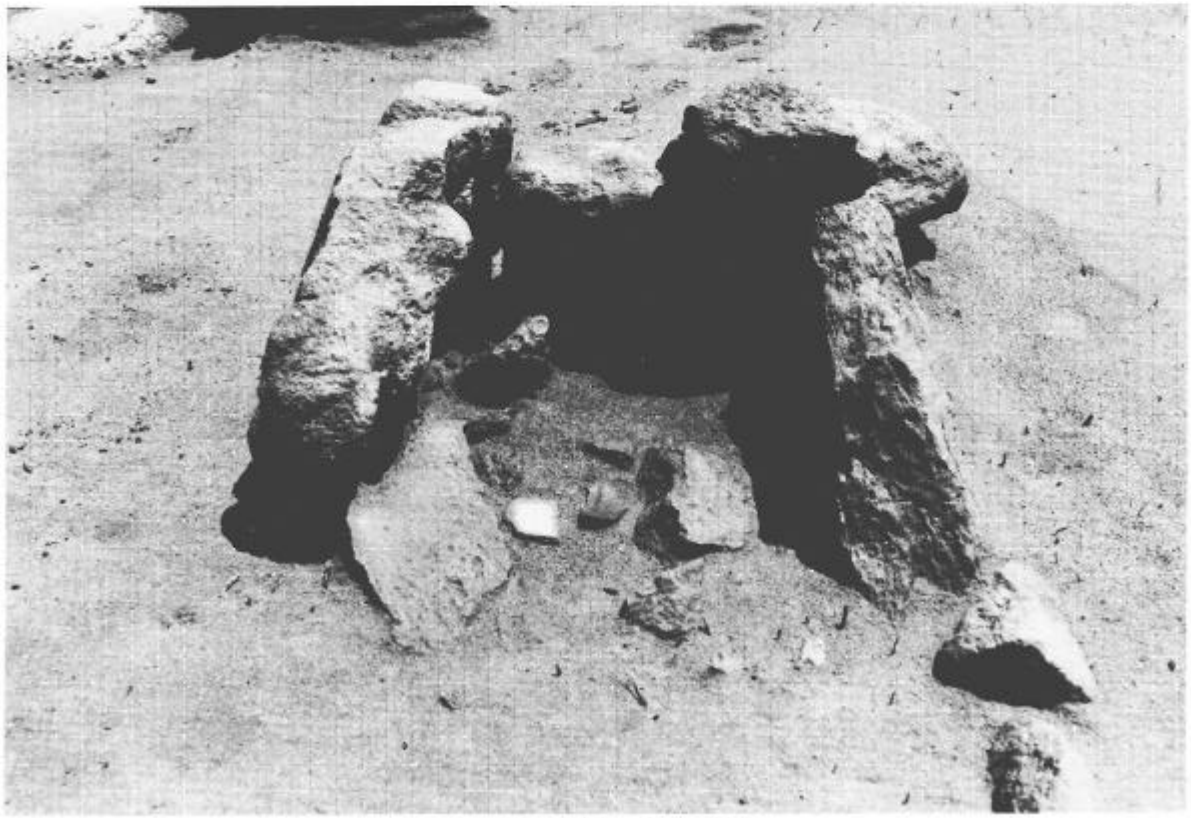
空から見たカウヤ遺跡　（東→西）　　1985年8月19日撮影　高度310 m

遺跡全景　（東→西）

ＳＩ 12　竪穴住居跡　（東→西）



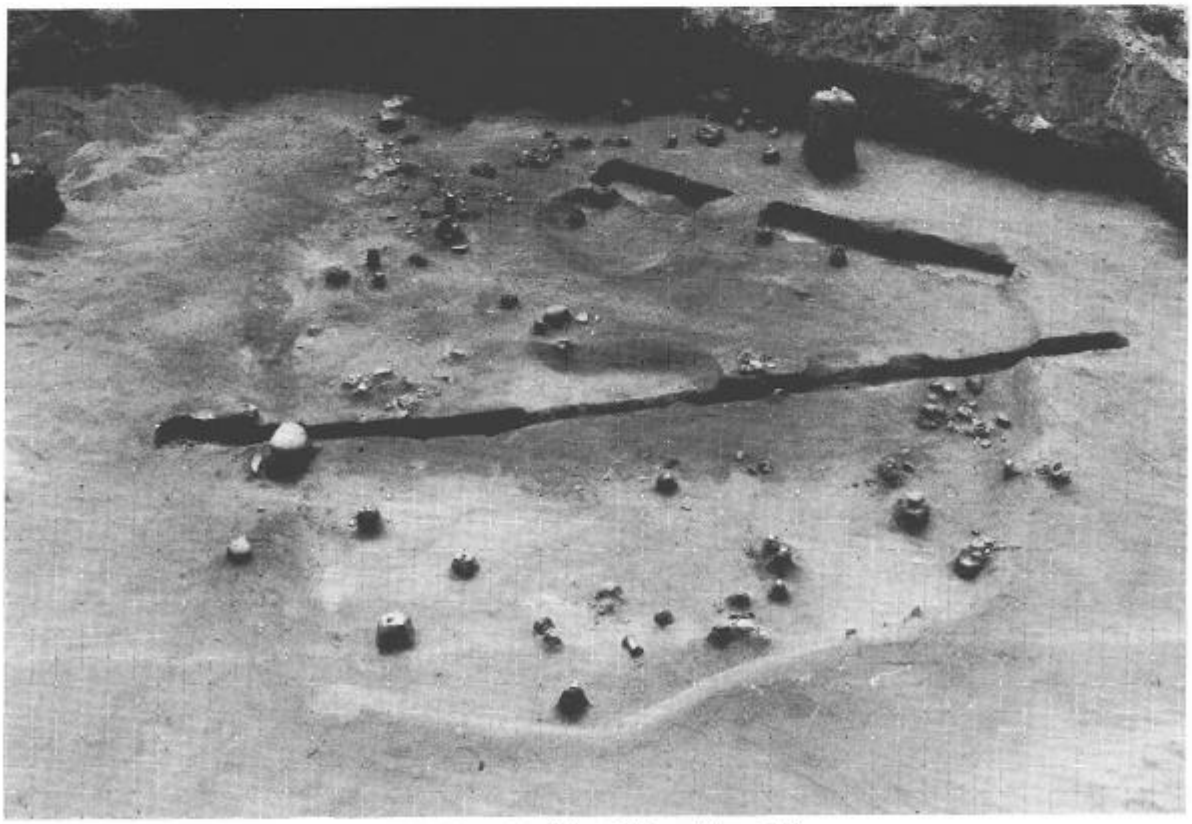
SD 05　溝　完掘後　（南→北）



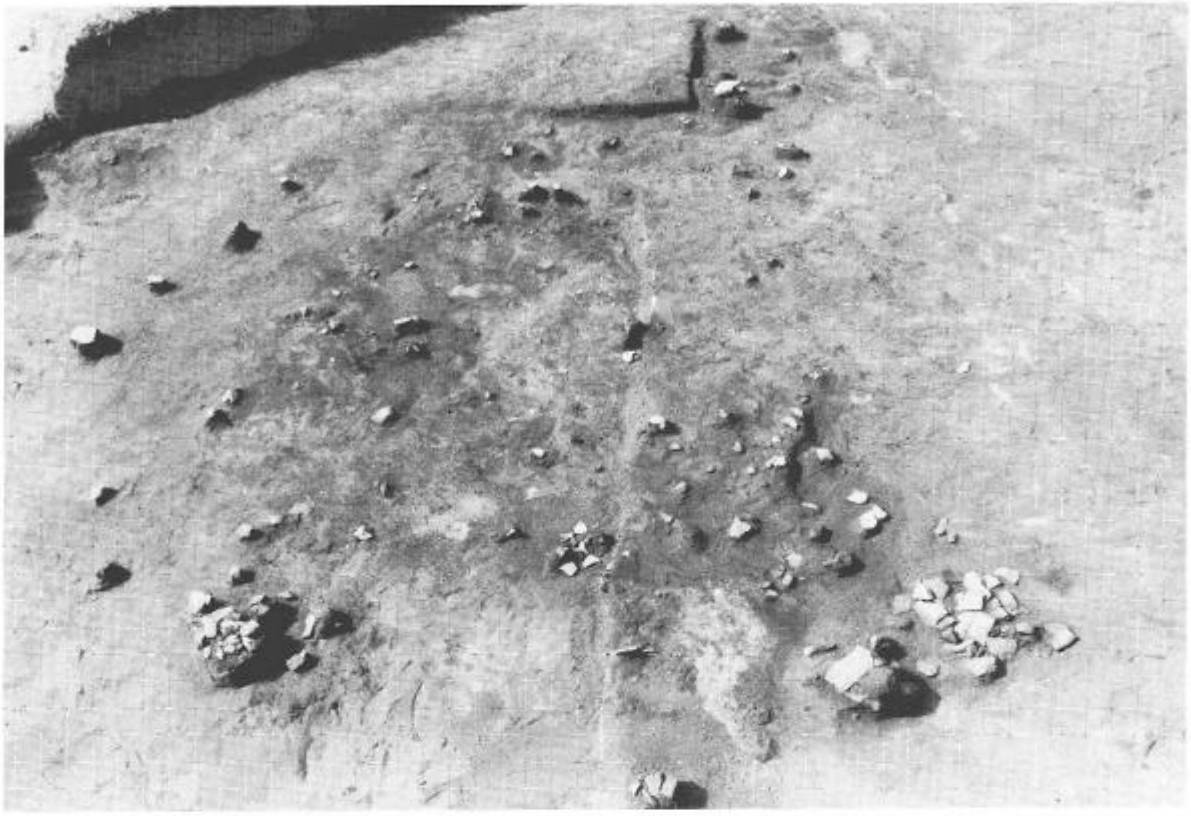
SQ 04　炉跡　（南→北）

第四図版

ＳＱ04　炉跡　立割り状況　（南→北）



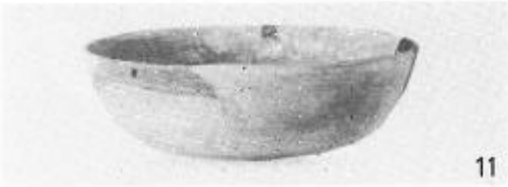
ＳＸ11　その他の遺構　（北→南）

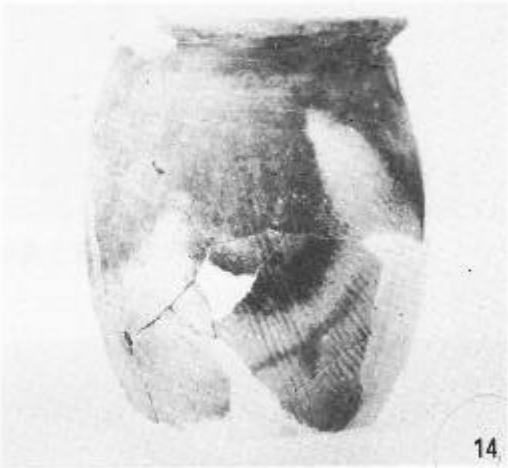


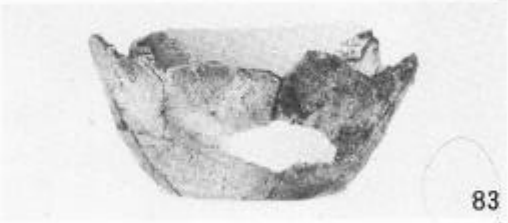
SN 06　焼土遺構　全景　（南→北）

SN 06　焼土遺構　土器出土状況　（南→北）

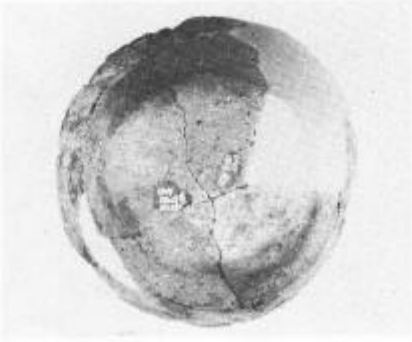
第六図版





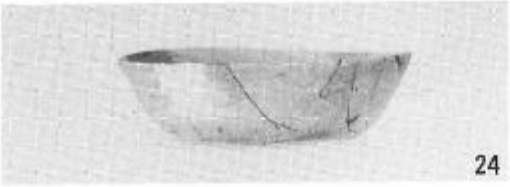


土器内面下端部の調整
—刷毛目—



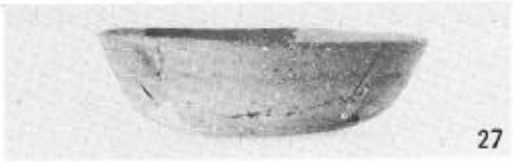
11～15　S I 12
82～84　S Q 04

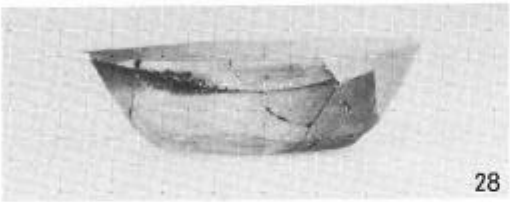
S I 12　竪穴住居跡、S Q 04　炉跡　出土遺物

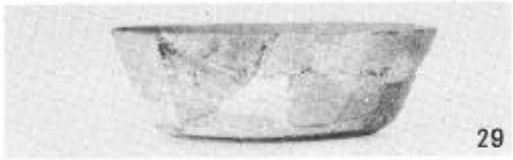

24

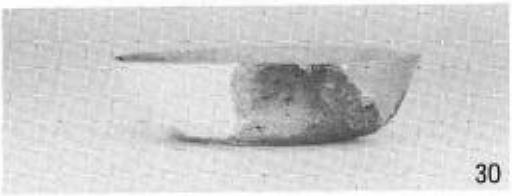
25

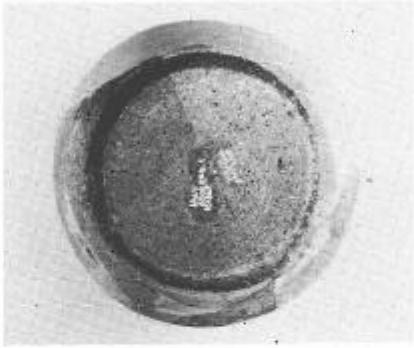
26

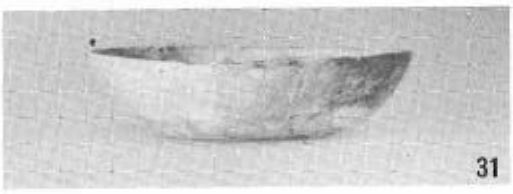

27


28

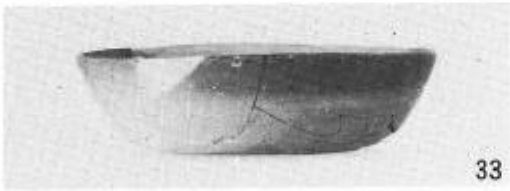

29

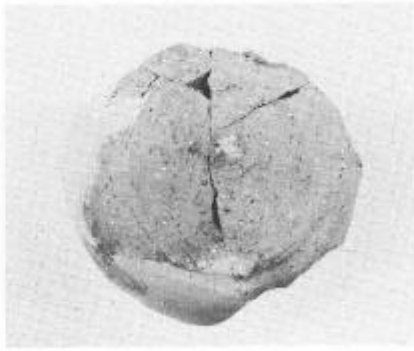

30

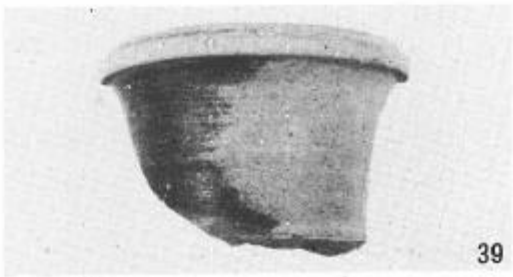



31

32


33

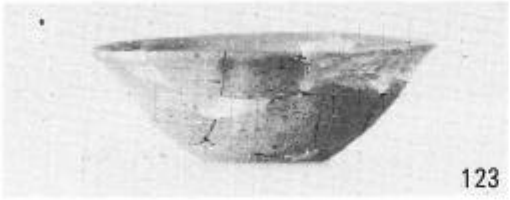


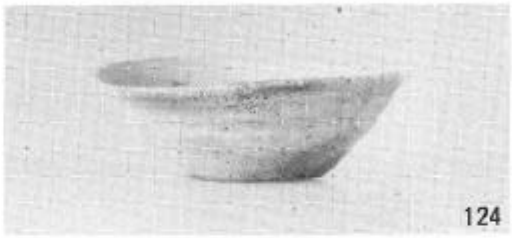

39

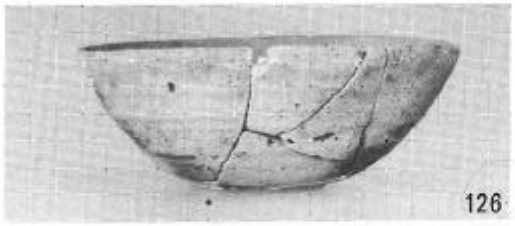
ＳＤ 05　溝跡　出土遺物

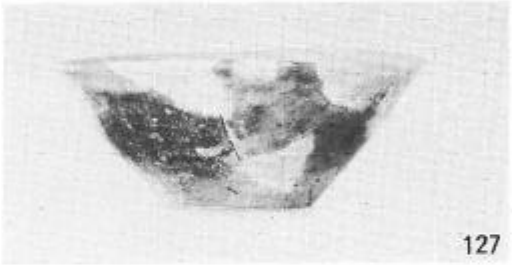
114

116

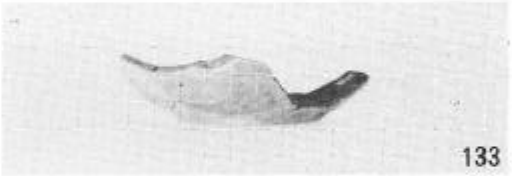

123

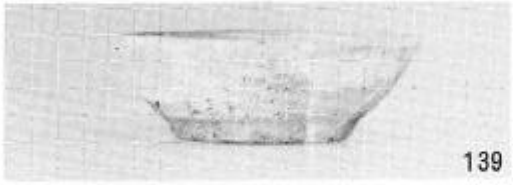

124

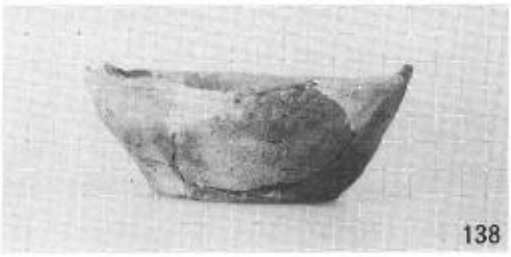

126

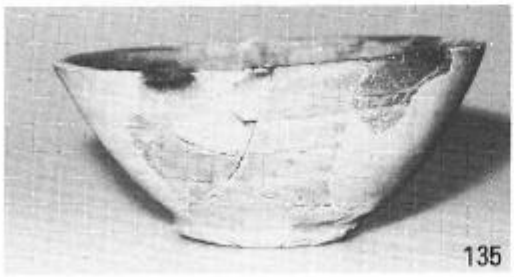

127

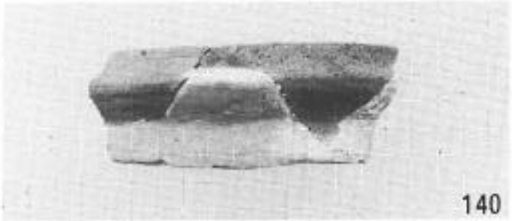
128

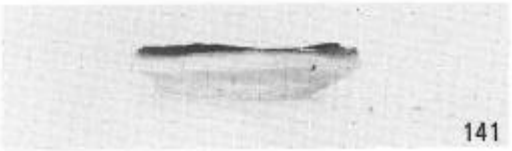

133


139


138


135

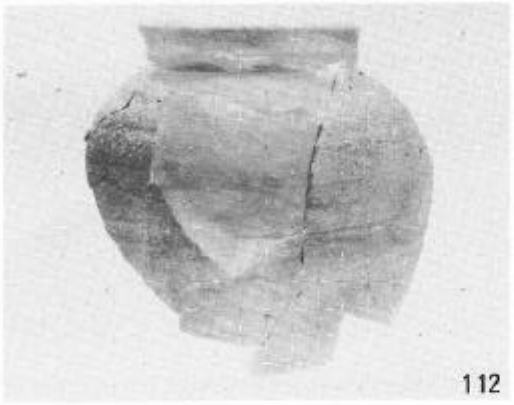

140

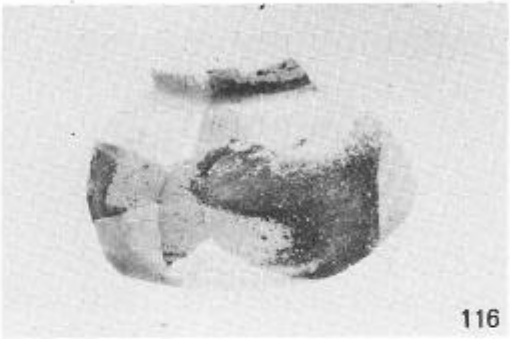

141

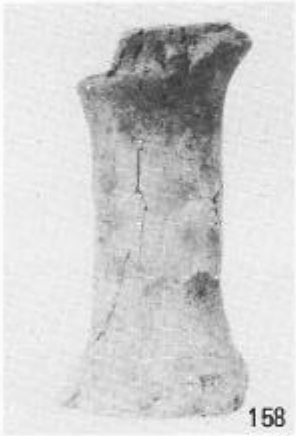
ＳＸ11　その他の遺構　出土遺物（1）

151

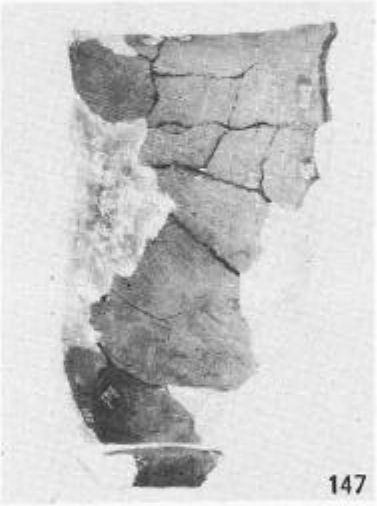
146


112


116

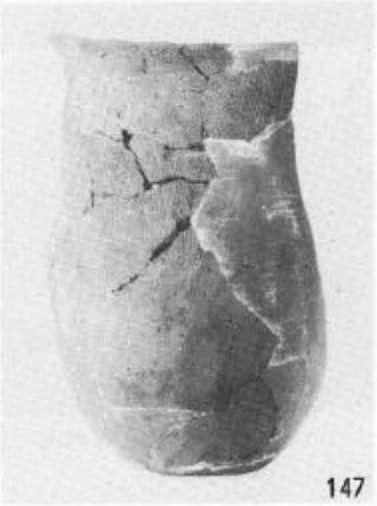

158

156


147

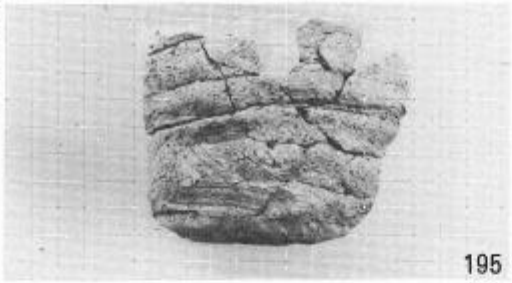
157

159


147

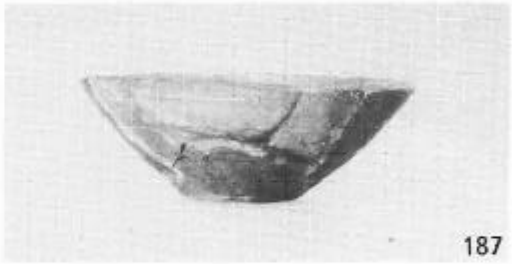
ＳＸ11　その他の遺構　出土遺物 (2)

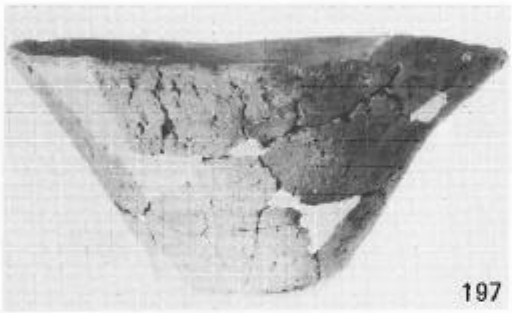
第十図版


195

230

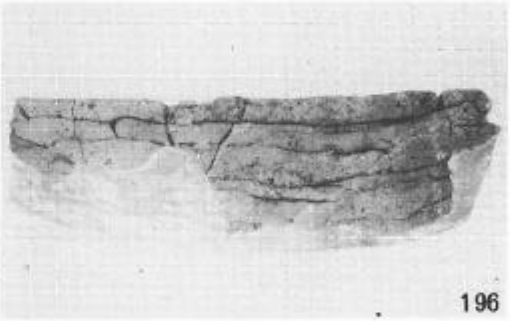
内面　195

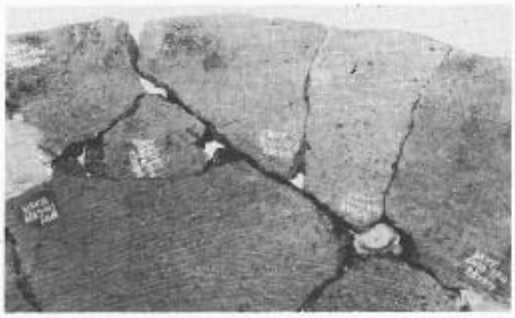

187

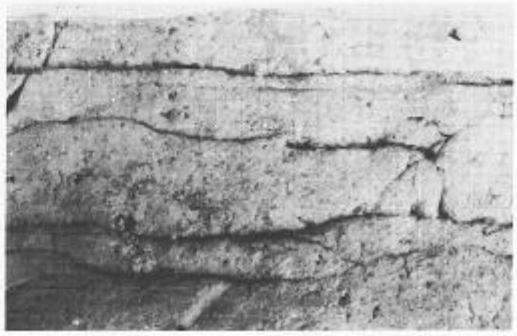

197

194

口縁部外面の調整　197


196


口縁部内面の調整　197


外面　196

230のみSN 20出土

SN 06、SN 20　焼土遺構　出土遺物